

入学式

目次

入学式のルーツを訪ねて	2
要約	8
1. 日本の入学式	10
●全国一斉に始まる入学式	10
●卒業式とそっくりの会場	13
●意外にさびしい参列者	15
●格式ばらない先生方の服装	18
●これが平均的な入学式だ	19
●ほとんど行われない話し合いと練習	24
●変わりばえしない入学式	26
2. 各地の入学式	29
●会場のようす	29
●新入生の服装	32
●式の雰囲気	32
3. 特色ある入学式	36
●入学式の工夫	36
●式次第	38
●会場の工夫	41
●会場の装飾	46
まとめに代えて	47
資料1 子どもたちの手で作る入学式	48
資料2 入学式実施計画案	52
資料3 調査票見本および集計表	54

~~~~~

# 入学式のルーツを訪ねて

放送大学教授 深谷 昌志



## 入学式のない学校

パリを訪ねた時、現地の学校に子どもを通わせている商社マンの奥さんたちの話を聞く機会があった。「入学の案内ぐらい来ると思っていたのに、何の連絡もない。学校へ行ってみても夏休みとかで、校門は閉まり、用務員の人もいない。ただ、登校日と時刻を知らせ

る、貼り紙があるだけであった。

入学の日が近づくにつれ、さすがに気になったのでデパートへ行き、クレヨンやらえんぴつ、それに、バッグなどを揃えて、当日を待った。いろいろと考えた末、洋服を新調し、着飾って、校門へ行ってみると、ほとんどのお母さんがふだん着のまま集まっていた。先生に名前を呼ばれた子どもが校庭の中に入

~~~~~

り、お迎えの時刻を知らされて、入学第1日目の朝が終わった。見回してみると、どの子どもも手ぶらで登校しており、めかしこんだ子どもは、ひとりもいなかった」という。

小学校入学というと、入学式を連想する。そして、和服姿の母親に手をひかれて登校する服装のピカピカした新入生の姿がうかんでくる。

現在、臨教審で9月入学をめぐる論議を重ねていると言われる。国際的な足並みを揃えるという意味で、大学などでは、9月入学が望ましいのは言うまでもない。そうは言うものの、桜の花の咲く中を校門をくぐるという感じはなんともすばらしく、そうした感覚の問題が9月入学をむずかしくしている。そういう筆者も、気分としては、4月入学を支持したい感じがする。そうした意味では、入学式は、歳時記の中の季語となった感が強い。

しかし、フランスに限らず、入学式という慣行を持っていない国が少なくない。アメリカに例をとれば、飯泉美耶子さんの『ニューヨーク郊外の学校で』の中に、「アメリカの学校って、入学式がないのね。祐里をスクールバスに乗せたら、それでおしまいよ。なんだか変な感じ」という会話がみられる。また、桐島洋子さんは、入学の手続きをした時、校長先生から、「公立ですから、学費も教材費ももちろん一切いりません、お子さんは手ぶらでいらっしゃればいいのです」(「マザーグースと3匹の子豚たち」と言われたただけだ」という。

お祭りさわぎやセレモニーのあれだけ好きな国民なのに、どうしたことか、小学校に限

っては、入学式の気配すらない。そうした事情は、イギリスやドイツの学校にも共通しており、手ぶらで学校へ初めて行く日が、入学の日ということになる。

もちろん、だからといって、学校が、子どもたちを放置しているのではない。もう一度冒頭のバリの学校の事例に戻るなら、入学した日から毎日のように、さまざまな連絡事項が伝えられ、クレヨンやえんぴつなどの求め方についての注意事項がつけられていた。入学前に全部というのではなく、必要な時に、少しずつ適切なものを求めさせようとするのが、その学校のルールだったらしい。

入学式の始まり

それでは、世界でもまれな入学式という慣行が、いつ、どうして、日本の学校に定着したのであろうか。

『加茂小学校史』(静岡県)の中に、明治21年の新入生の入学月日が書かれている。それによると、3月15日の2名、16日1名、19日1名のように、9月2日までの15回に分けて、20名の子どもたちが入学している。いわば、塾へ入るような感じで、さみだれ式に、子どもが入学してくる。これでは、入学式を挙げるわけにもいきまい。

日本の学校、特に小学校は、外から見ると、文明開化の先達という感じが強いが、その実質は、土着の寺子屋的な性格を受けついで成長したと言われる。その寺子屋は、一応、数え6歳の6月6日に入塾すると、けいこごとのすじがよくなるという慣習が強かったものの、出入りの自由を特色としていた。豊かな

家庭ならば和紙、そうでなければ、同僚となる子どもへの菓子などを持って挨拶をすれば、塾入りとなるのが常であった。

明治時代へ入っても、そうした慣習が続き、学校が曲りなりにも、誰もが入学する所として定着するのは、明治30年代に入ってからである。

現在では、すでにふれた通り入学式に桜の花が付きものだが、周知の通り、4月入学を実施している国は10カ国にみえない少数派で、ほとんどの国では9月に生徒を受け入れている。日本でも、旧制高校や大学は、長い間、欧米流の7月卒業、9月入学の制度を採用していた。

しかし、明治18年、高等師範学校の入学が4月に切りかわったのを皮切りに、小学校も明治25年から4月入学となり、それに順応する形で、旧制中学の入学も4月へ移行していった。大学の場合、国際的な関連があって、最後まで9月入学制がとられていたが、大正10年、大学令の改正に前後して、他の学校と足並みを揃えるようになった。なお、こうした形で、4月入学が実施されたのは、入学や卒業を官庁や実業界の会計年度に合わせようとしたのに加え、徴兵令の中にある4月1日に満20歳になった者の規定に準じたためと言われる。

もともと、9月から4月への移行はかならずしもスムーズでなく、特に、小学校では、4月1日の入学とすると、4月2日以降生まれの者は就学を1年待たねばならない。そうした子を救済するために、明治42年、文部省は、「土地ノ情況ニ依リ9月1日ニ始リ翌年8月31日ニ終ル学年ヲ置クコトヲ得」と定め

た。しかし半年間の差をおいて学年をスタートさせる「^{パラレル}雁行級」(Parallelklasse)を採用したのは数校にとどまり、義務教育段階での4月入学が定着することになった。

初めて学校へ行った日のことは一生の感銘として残るのではと思う。そこで、なん十冊からの自伝にあたってみた。しかし、自伝文学としても定評のある大岡昇平(大正4年、東京府下渋谷第一小学校入学)の『幼年』を見ても、「入学式は母に連れられて行ったに違いないが、その記憶はない」と書かれているにとどまっている。その他の場合も、ほとんどと言えるほど記述が認められない。入学式がなかったか、それとも、印象に残らなかったかのいずれかであろう。

そうした中で、入学式についての思い出を書いているいくつかの内容を紹介すると、以下の通りとなる。

「おかつば頭にメリンス友禅の着物、えび茶の袴をはいて、私は意気ようようと、ひとりで校門をくぐった。その頃の下町には、入学式に父母がついてゆくという習慣はまだなかった」

(大正4年に東京府下浅草小学校へ入学、沢村貞子『私の浅草』)

「枕元に袴と着物が揃えてあった。着物は私の入学のために、母が夜なべをかけて縫ってくれた新銘仙の裕である。……入学式に付き添ってくれたのは父であった。身重だった母は、店の前に立って私たちを見送ってくれた」

(大正7年に東京府下大和田小入学、藤田佳世『大正渋谷道玄坂』)

「母に附添われて小学校の入学式にいった。……入学式は校長の訓辞、君ヶ代の合唱と御真影遙拝、教育勅語を紫のフクサから、うやうやしく取り出して校長が朗読した」

(大正9年に東京府下常盤小入学、北園孝吉「大正・日本橋本町」)

たまたま大正生まれの人の自伝が多いが、明治生まれの人の記憶が不確かという意味ではあるまい。大正へ入ると、御真影遙拝と教育勅語奉読に象徴されるような重々しい感じの入学式が定着したため、子どもの心に残っているからであろう。

国家行事としての儀式

『小布施小学校沿革誌』(長野県、明治5年創立)によると、この学校では、明治24年から入学式が始められている。

この明治24年という時期は、教育史的にみて重要な意味を含んでいる。なぜなら、同年6月17日に、文部省は「小学校に於ける祝日大祭日の儀式に関する規程」(省令第4号)を発している。これは、前年に発布された教育勅語や君が代の国歌としての制定(明治21年)、御真影の下賜(明治20年頃から)などの動きを背景として、儀式のパターン化を意図したもので、紀元節、天長節、元始祭などの日には、①御真影へ最敬礼と万歳三唱、②教育勅語奉読と訓話、③儀式に応じた歌の合唱を骨子とした式を挙げるように指示している。さらに、父兄の式列席や子どもたちに茶菓を配るなども奨励されている他、詳細は各府県知事が定めると規定されていた。

文部省令をうけて、各府県では、明治25年

前後に儀式の挙げ方についての次第を定めている。一例として、埼玉県の「小学校祝日大祭日、儀式ニ関スル次第等」(明治25年1月26日)をあげると、入場の順序を、学校長、教員、生徒、参列員、参観人とする。「天皇陛下及皇后陛下ノ万ヲ奉祝スルニハ学校長先ツ万ヲ唱へ教員生徒之ニ和スルコト三次トス」「敬礼ヲ行フニハ総テ風麗又ハ号令ニ依ルベシ」(『埼玉県教育史』第4巻)などが、こと細かく定められている。

また、長野県の「小学校祝日大祭日儀式次第制定につき県令」(県令8号、明治25年2月)では、紀元節などの次第を以下のように定めている。「1、父母などの参観人着席 2、生徒着席 3、学校職員着席 4、御真影奉開 5、一同最敬礼と万歳 6、君が代合唱 7、勅語奉読 8、学校長の演説 9、唱歌(紀元節の歌)の合唱 10、一同最敬礼 11、御真影奉閉 12、一同退席」(『長野県教育史』第11巻)

さらに、明治25年3月、県令33号として発せられた千葉県「小学校祝日大祭日ノ儀式ニ関スル次第等」をみても、今まで紹介した内容と基本的な性格が一致しているが、「最敬礼ノ式ハ体ノ上部ヲ前ニ傾ケ頭ヲ垂シ手ヲ膝ニ当テ敬意ヲ表スルモノトス」(『千葉県教育百年史』第3巻)などの規定がみとめられる。

こうした形で、明治20年代後半から、三大節(四方拝・紀元節・天長節)を中心として、学校行事の定式化が進んでいく。勅語奉読や君が代斉唱、御真影への敬礼にシンボライズされる重々しい感じの国家主義的な性格の強

〰〰〰

い儀式である。

明治36年、井上毅文相は、子どもたちの中に、式典に「厭倦ノ機」がみられるから、儀式は三大節に限定し、三大節はおごそかに行うべきだが、その他の式の扱いは学校の任意にまかせると指示している。実をいうと、今まで触れてきた学校行事の中には、三大節の他に、^{あまつかみ}神嘗祭や^{にいのかみ}新嘗祭、神武天皇祭、孝明天皇祭などが含まれており、儀式が多くなりすぎたことも確かであった。

換言するなら、明治30年代の中頃になると、そうした指示が必要なほど、各学校で儀式の形式化が浸透していったのであろう。

もちろん、入学式の場合、国家的な意味合いが薄いだけに、三大節のような形での形式化はストレートな形で進んでいない。しかし、富山県が明治33年に制定した入学式の次第は、

「1、教員生徒入場 2、入学生徒、保護者入場 3、学校長入場 4、学校長挙式の辞 5、君が代 6、勅語奉戴 7、学校長訓辞 8、生徒総代祝辞 9、唱歌 10、閉式の辞 11、学校長退場 12、入学生徒、保護者退場 13、教員生徒退場」(山本信良・今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社)の通りである。教育勅語と君が代とが登場するあたりに、入学式が三大節とほぼ同じ形で形式化されているのがわかる。つまり、学校にとって意義のある行事が、国家的な色彩を帯びた行事に準じた形で浸透し始めている。

もちろん、先に紹介した自伝の回想が示すように、入学式は三大節のように厳密に施行されることはなかったが、学校ごとに、徐々に形を整えて、明治30年代後半から大正初め

にかけて、定式化されていったと考えられる。

誰のための入学式か

今まで触れてきたように、日本の入学式は国家主義的な教育儀式の性格を基本的に継承して、成立した歴史を持つ。したがって、国家主義的な原理で教育が動いていた第二次世界大戦まで、さらに言えば、国家主義的な性格が強くなるにつれて、入学式の形態が硬直化し、重々しさを増していったのは当然の帰結と考えられる。それだけに、そうした束縛から解放された第二次世界大戦後なら、教育の民主化の一環として、入学式の民主化も進んだのではないか。

そうした観点から、いくつかの実践記録をひもといてみた。しかし、入学式についての記録は皆無に近いが、それとも、旧態依然たる——といっても、勅語奉読や君が代がないのは、言うまでもないが——ものかのいずれかに限られていた。一例をあげるなら、明石プランで知られる兵庫師範女子部附属小学校の「小学校のコア・カリキュラム」では、入学式の活動として、講堂で式をする、記念写真をとる、先生の顔を憶える、歩き方に注意するなどが挙げられ、入学式を通じて、子どもたちは、「お話を静かに聞く」、「歩き方や並び方を憶える」と書かれているにとどまっている。子どもたちの生活に根ざした教育をスローガンにしたコア・カリキュラムでも、入学式までは視野に入らなかったのではなかろうか。

なお、明治以降、国家的な儀式が学校の中で制度化されていったのと対照的に、学校が、

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

本来持っていた行事の中で忘れ去られたものも少なくない。たとえば、寺子屋では、書き初めや七夕、天神講、節句などが、単調に流れがちな寺子屋での生活に彩りをそえたと言われる。

アメリカの学校でも、入学式がないのは前述の通りだが、クリスマスやハローウィン、イースターなどの折りには、子どもたちは、なん日もかけて、お祭りの準備をしている。

12月初めに、アメリカの西海岸の学校を訪ねたことがあったが、子どもたちは、あいている時間をみつけては、クリスマス・カードの製作やツリーにつける飾り物の色づけに追われていた。

学校の行事とは、本来子どもたちの生活に密着した、そうした季節ごとの行事やお祭りをとりあげるところに意味があるように思う。

入学式に例をとっても、入学式が誰のためのものなのかが問題になる。明治以降の入学式は、子どもたちを国民の一人として位置づけ、そうした意識を子どもたちに植えつけるのを目的としていた、いわば、国としての必要性から出発した子ども不在の入学式であった。

したがって、視点を変えて、子どものため、さらに言えば、学校生活のスタートをきる子どもたちを祝ってという意味ならば、形式ばった入学式は不要であろう。子どもたちは、ただでさえ緊張した気分で登校してくる。そうした子どもを、形式ばった儀式でおどかすのは、教育的に考えても、悪影響を与える以外のなにものでもない。

島小（群馬県）の実践で知られる斉藤喜博

の『学校づくりの記』には、新入生を主人公にした入学式の詳細が描かれている。全体として、入学を祝う会といった感じが強いが、こうした部分に目を配ったあたりに、斉藤喜博の教育実践家としての確かさを感じる。

島小ほどでないにせよ、入学式にさまざまな工夫をこらしている学校は少なくない。入学の日に備えて、秋のうちから、校門から入口まで球根を植えた学校、あるいは、上級生たちが学年ごとに、新入生を迎えるための歌を作った学校、そして、同じ地域に住む上級生たちが誘い合って新入生をつれてくる学校などが、その一例である。

しかし、残念ながら、現状では、そうした試みは少数例にとどまっている。つまり、それだけ子どものためをつきつめて考えている学校が少ないと言えなくもない。

学校へ入学できるまで成長したことを祝い、そして勉強を始めるにあたって子どもたちを励ます。そうした立場から6年間通う小学校生活のスタートの日に、どんなプログラムを用意したらよいか。新しい感覚で、入学式の試みに気を配ることは、授業の改革と同じ程度に、むしろそれ以上に、大きな意味を持つ。とかく批判の声の多い学校のあり方を考える第一歩として、入学式のあり方を根本から捉え直してみたい。そうした気持ちから、前号の卒業式に続いて、入学式の全国調査を実施してみた。はたして、現在の入学式は、子どものためになっているのだろうか。

<深谷昌志著『子ども考現学』（福武書店）の「入学式」の項を補筆したものである>

調査レポート / 入学式 (全国調査)

要 約



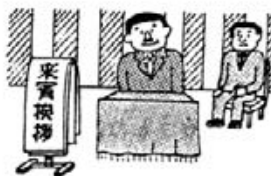
①入学式の日時

4月7日(月)午前10時から1時間ぐらしかけてが、昭和61年度の入学式の平均値となる。
(図2～図4)



②入学式へ参加する子ども

式場の広さの関係なのか、全校児童が参加する学校は39%と4割を下回っている。そして、新生徒だけで入学式をする学校が2割を超える。
(図7)



③入学式の来賓

PTA会長や役員、幼稚園園長など、数名に限られ、卒業式のような華やかさには欠ける。
(図9)



④入学式の服装

礼服を着用しているのは校長で、その他の教員はくつろいだスーツ姿が多い。
(図11)

調査概要

1. 調査主題 「入学式」
2. 調査視点 学校教育の出発点とも言うべき入学式

についての意識、進行状況、地域特性を探り、これからの入学式のあり方について考える。

3. 調査項目 入学式の実施期間 / 入学式の内容 / 入学式の服装について / 入学式の会場について / 入

放送大学教授 深谷昌志

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠

千葉市立平山小学校教諭 広森 滋

⑤入学式の準備

学年末から学年始めにかけての多忙な季節のためか、入学式の準備をきちんとしている学校は少ない。(図21)

⑥特色のある入学式

花のアーケードを作る、あるいは、スライドを活用する、人形を使ったり腹話術を試みたりするなど、入学式に工夫をこらしている学校もみられる。

(3章)

<全体として>

入学式は、子どもたちが初めて学校の門をくぐる日であるから、それなりの準備をして入学式を迎えるものと信じていた。今回の調査結果によると、格式ばらずにくつろいだ感じの入学式が多い。そのこと自体は悪いと思わないが、正直に言って手なれた行事を展開している印象を受ける。教員の転出や採用の重なる季節であることを考えると、本腰を入れての準備はむずかしからうが、せめてひとつ、今年はこれという入学式の目玉を作ってはどうか。ひとつがさま変わりするだけでも、全体の印象は大きく変わる。そして次の年も、またひとつ入学式に工夫をこらせばよいのである。そうした一歩前進の姿勢を、入学式に求めたい気持ちがする。

学式の満足度/入学式の準備について/入学式を
ふりかえって

4.調査時期 昭和61年6月

5.調査対象 調査対象校の校長以下担当教員

6.調査方法 全国の小学校より10分の1の抽出で、
2,000校を選び、調査票を送付。

7.サンプル数 564校

1.日本の入学式



運動会・卒業式に比べると、やや軽く扱われている気配のある入学式だが、数ある学校行事の中にあつて、欠かすことのできない大切な行事であることには違いない。今回は、新入生たちにとってはむろんだが、教師にとつても、学校教育の出発点とも言うべき入学式について、全国レベル(全体集計)、地方レベル(地方別集計)、個々の学校レベル(オープンアンサー等)の3つの視点から見てい

くことにしたい。

なお、調査校の総数は564校(回収率28%)で、調査校のプロフィールは図1に示したとおりであった。調査への回答は、教務主任または担当の先生へお願いした。調査時期は、昭和61年6月である。

では始めに、全国の平均的な入学式を、全体集計の結果から見ていくことにしよう。

全国一斉に始まる入学式

4月上旬、テレビのニュースを見ていると、どの局も入学式の様子を伝える日がある。これは、入学式が日本各地で一斉に行われていることを示すエピソードであるが、図2は、この事実を端的に物語っている。この図は入学式の行われた日を表したものであるが、4

月7日(月)を頂点として、その前後の日を加えると、およそ80%に達する。(ただし4月6日は日曜日なのでのぞく)なんと、4月5日、7日、8日の3日間の間に、日本全国の8割の学校が入学式を行ってしまうのである。

さらに図3の入学式を始めた時刻を見ると、10時ごろから始める学校が約60%、前後の「9時半ごろから」と「10時半ごろから」を加えると、やはり80%に達する。しかも、図4の入学式に要した時間を見てみると、30分ぐらゐが約30%、1時間ぐらゐが約60%となっている。ほとんどの学校が、10時前後から小1

時間程度の式をしているのが入学のセレモニーになる。

このように、入学式は日が同じばかりでなく、ほぼ同じ時間帯に、日本全国で一斉に行われている。昭和61年度の場合、4月7日(月)の午前10時から11時までの間に入学式をしたというのが、入学式の平均的な姿となる。

図1 調査校のプロフィール

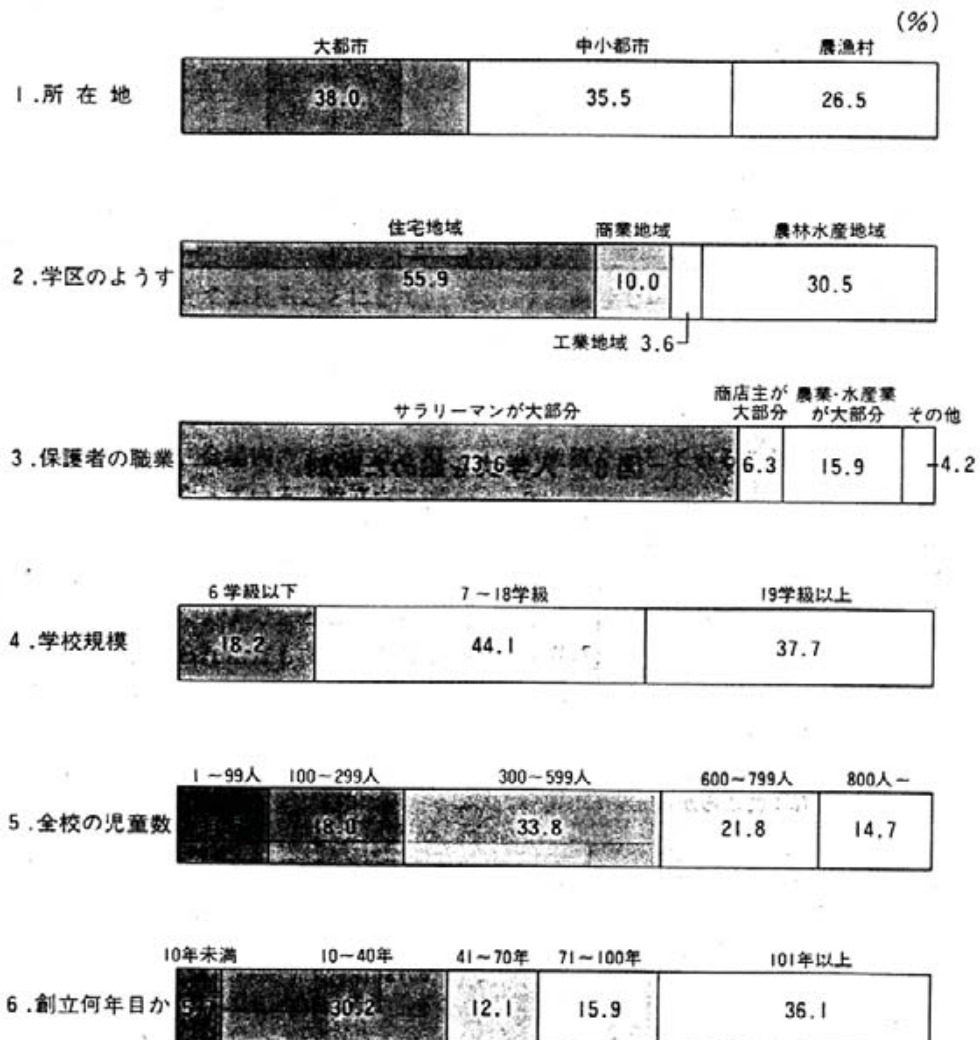


図2 入学式が行われた日

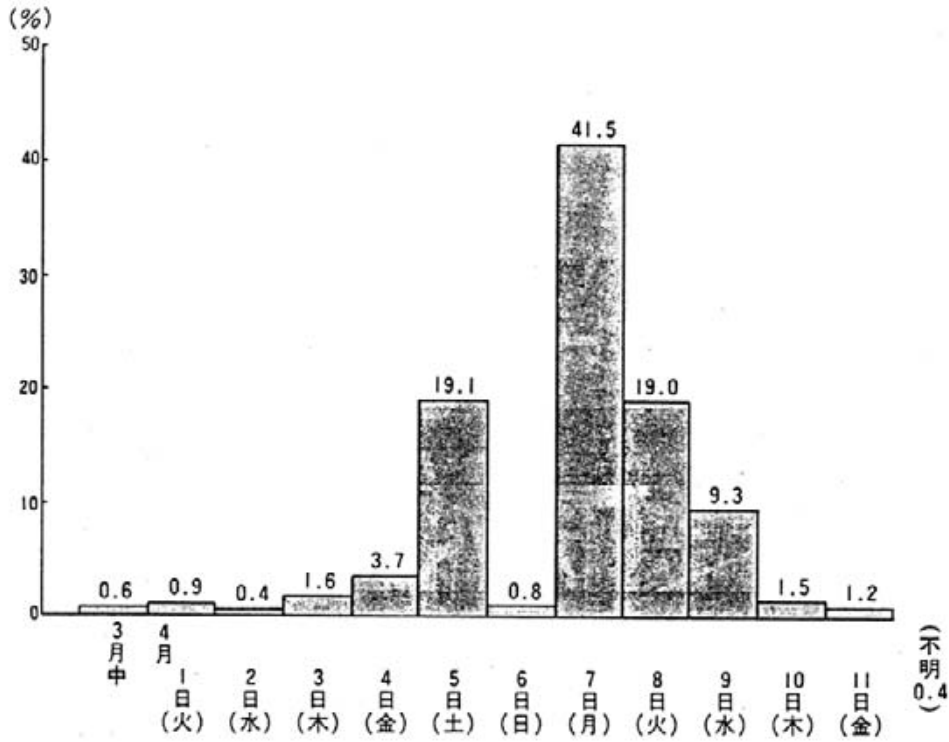


図3 入学式を始めた時刻

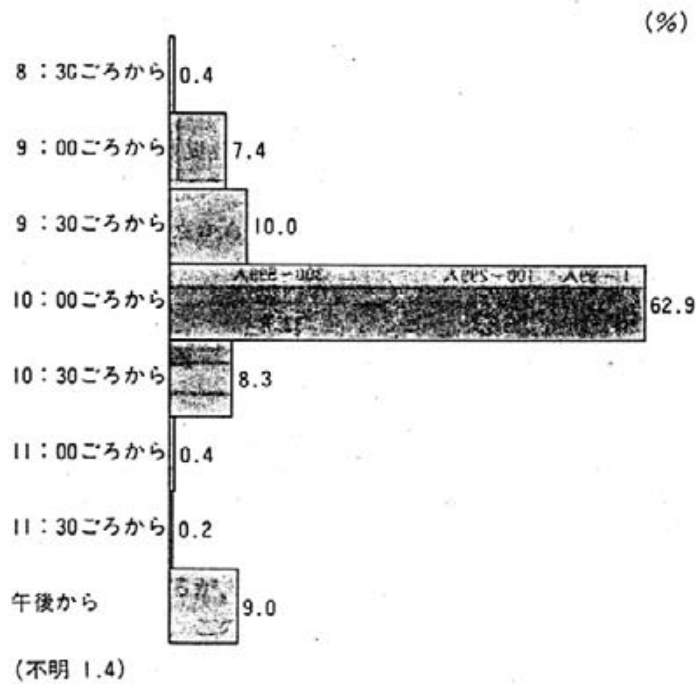
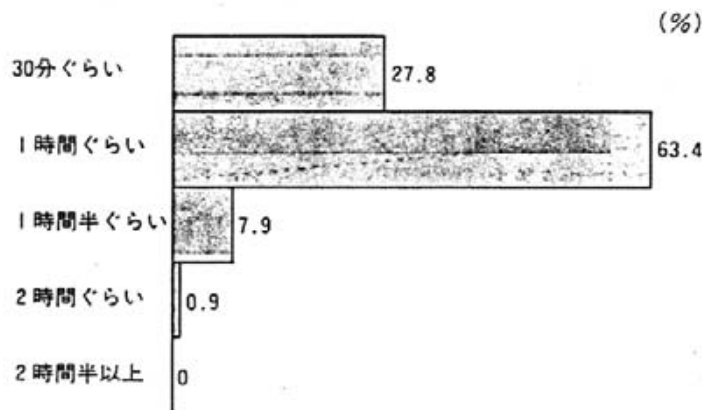


図4 入学式に要した時間



卒業式とそっくりの会場

入学式の開会はあとでふれることにして、はじめに、会場のような様子から見ていこう。

まず会場だが、図5を見てほしい。体育館・講堂など、自校の施設で行う学校がほとんど100%近くである。会場内のような様子と言うと、図6のようになっている。旗立台には校旗が、壁には日の丸が、壇上には大きな生け花が、そして会場全体を包み込むように紅白幕が飾られている。「はて、どこかで見たような会場だ」と思われた方も多しことだろ

う。前号でレポートした「卒業式」の会場ととてもよく似ているのである。参考までに、卒業式の会場(参考図)をのせておくので、比較していただきたい。両者がひじょうに近い数値を示していることに気づかれたであろう。

ここで、卒業式と入学式が、春休みをはさんで1カ月ぐらいの間に続けて開かれることを考えると、どうやら卒業式の会場をそっくりそのまま流用していることが想像できる。

図5 会場

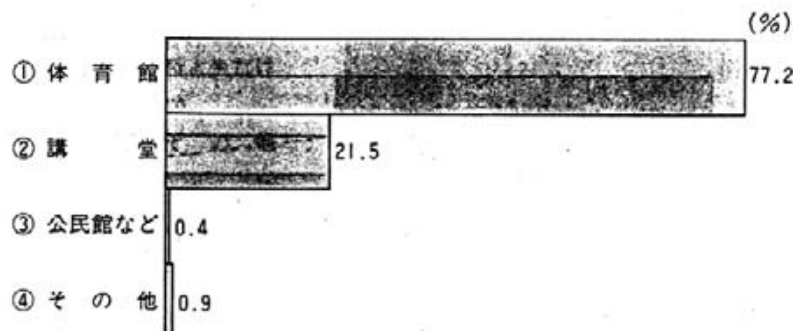
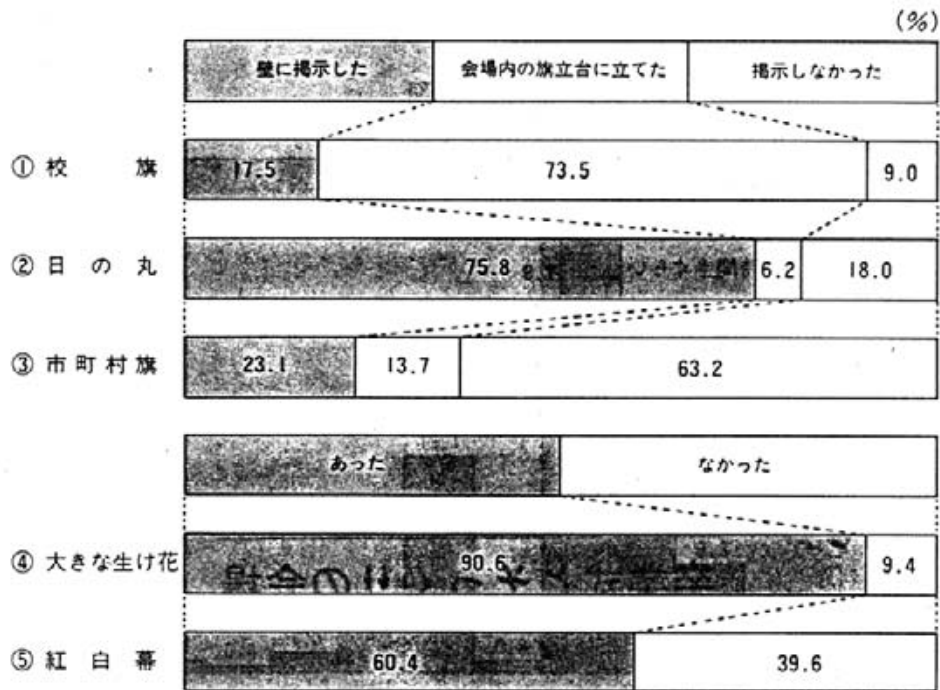
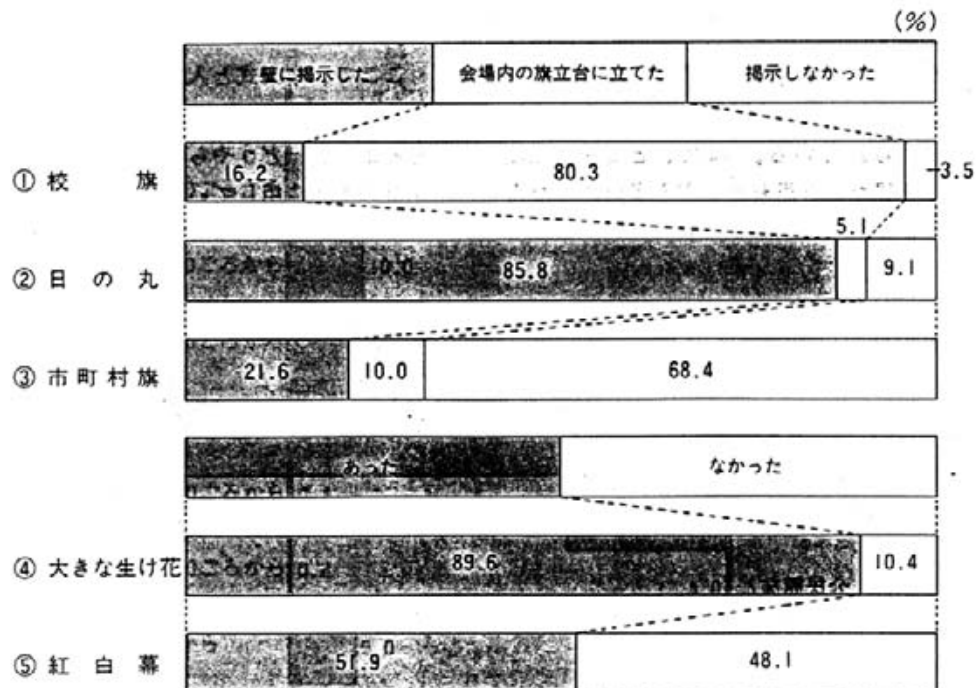


図6 会場のようす



〈参考図〉 卒業式の会場のようす



意外にさびしい参列者

希望に胸をふくらませて参列した新入生を全校児童が温かく迎え、多くの来賓がそのようすを見守る。そんな入学式を思い浮かべながら参列者のデータを眺めてみて、ややびっくりした。

まず、図7の入学式に参加した学年を見ていただきたい。全校児童が参加する学校は、全体に占める割合が一番多いとはいえ、わずか39%である。それに対して、新入生と6年生だけという学校が21%、なんと新入生だけという学校も21%になっている。大規模校などでは、全校児童が式に参加することは、物理的に不可能に近いかもしれない。それにし

ても、会場にいるのは新入生だけで、迎えてあげる在校生が全くいない入学式というもの、少しさびしすぎるのではないだろうか。

次に、図8は、入学式への保護者の参加のようすを見たものである。さすがに、ほぼ100%の保護者が式に参加している。しかし、図9の来賓になると、少しようすが違ってくる。来賓の人数は、10人以下の数値を加えると58%になる。この数値は卒業式の41%（前号参照）に比べると20%近く高くなっており、入学式の来賓がさほど多くないことを物語っている。同様に図10の祝電でも、5通以下が47%と、卒業式の37%（同）を上まわっており、

図7 参加した学年

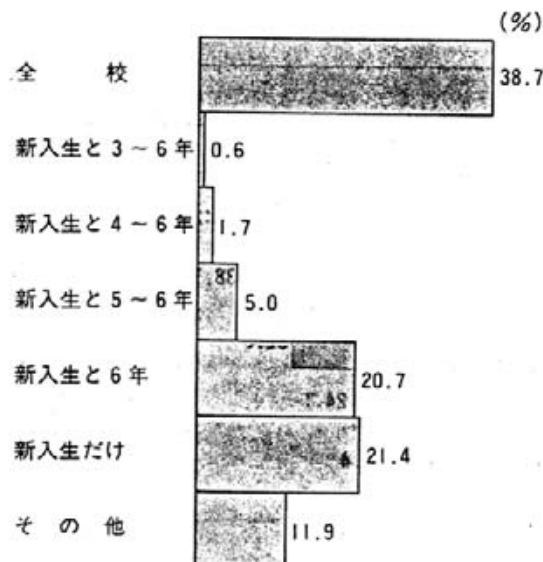


図8 式への保護者の参加

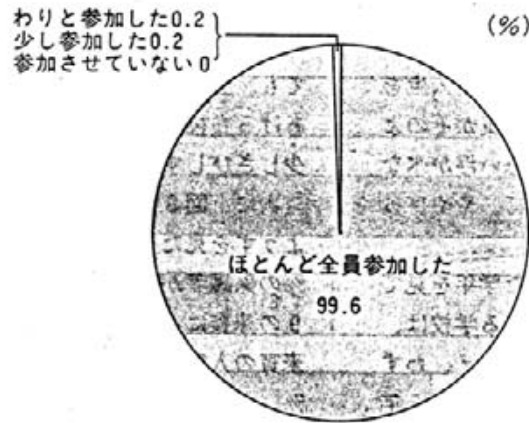
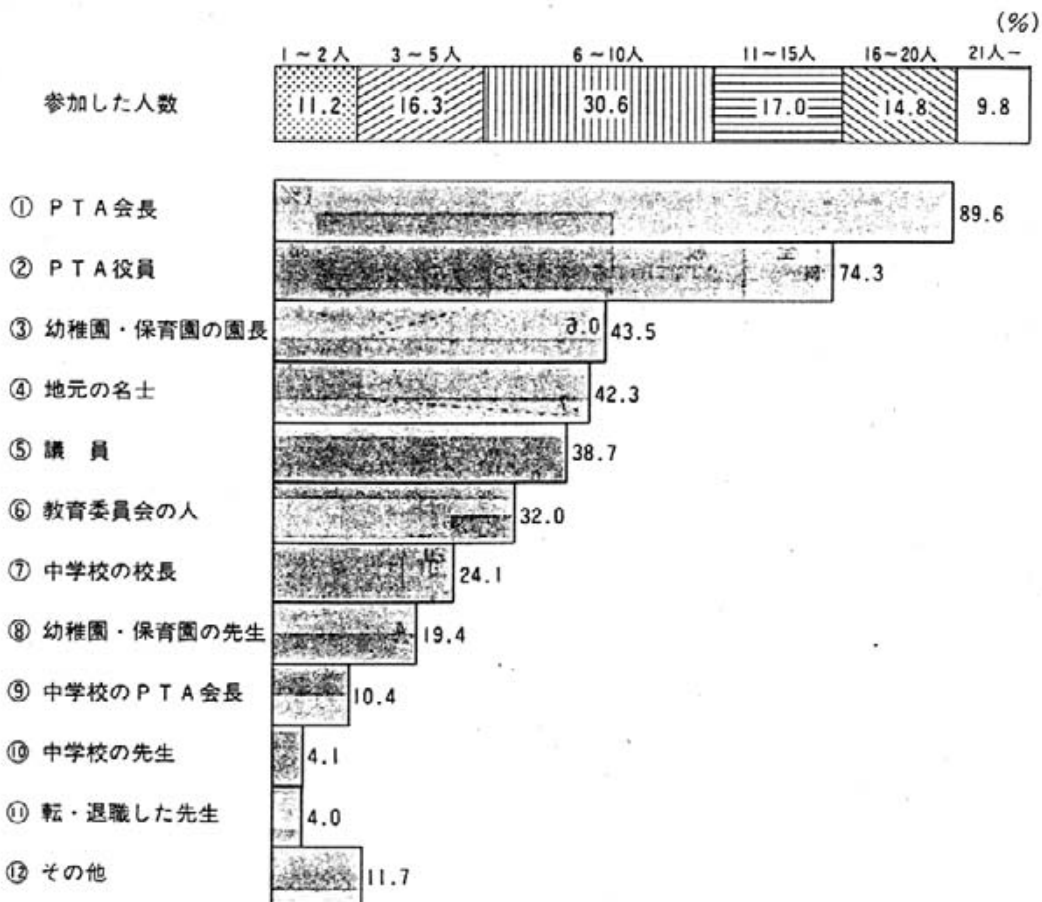


図9 来賓

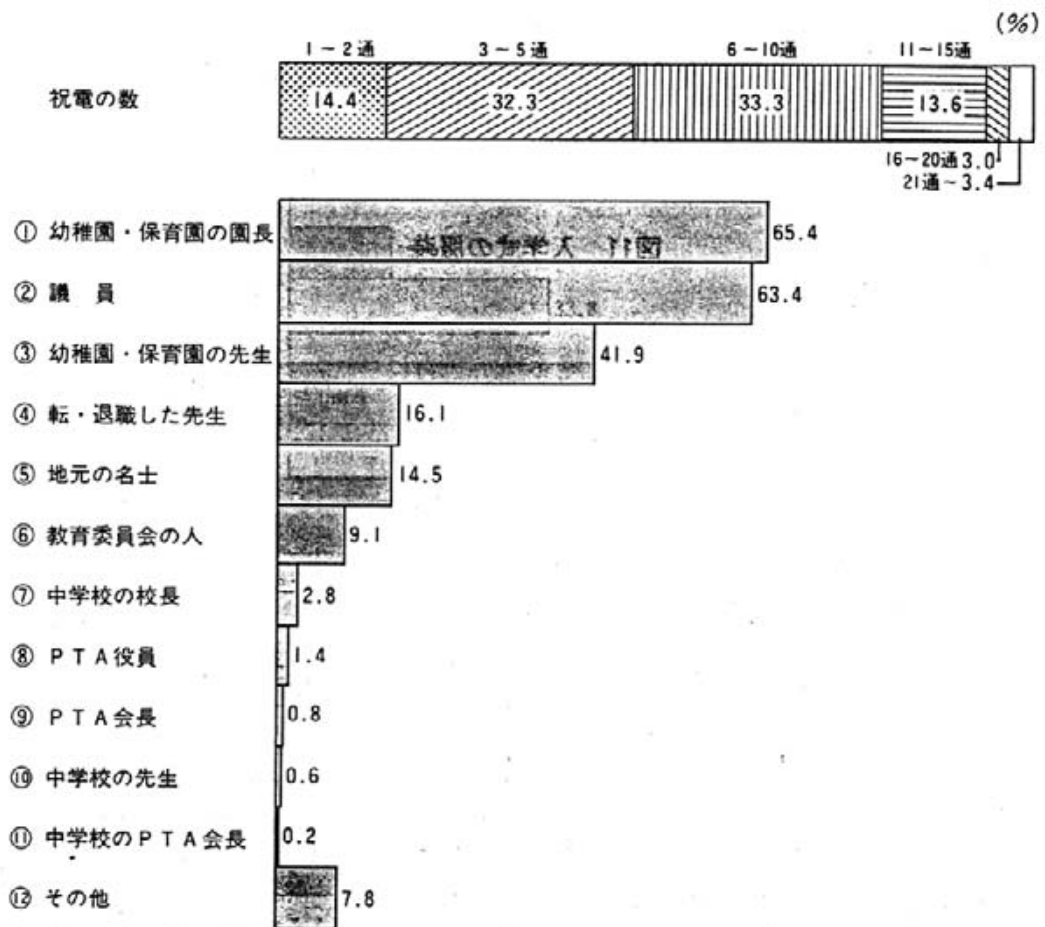


多くないことを示している。

このように、入学式の参列者は予想以上に少なかった。もちろん、来賓が多ければよいというものでもないが、「セレモニーは来賓

つきで」という日本の風土を考慮すると、入学式は、卒業式ほどの重みを持たないであろう。

図10 寄せられた祝電



格式ばらない先生方の服装

参列者のようすを見てきたついでに、その服装も見てみよう。図11は、先生方と新入生の服装を見た結果である。図を見ると、左端の「礼服」を着ている先生が、意外に少ないことに気づく。逆に、1年生以外の先生などは、ふだん着で参列する先生が男性で37%、女性で41%と3分の1を越える。

さらに図12は、職員の服装について、卒業

式と比べたものである。図は、最も格式を表している礼服について見てみた。一見してわかるように、卒業式のほうが、礼服を着用している。担当学年の男の担任に至っては、入学式8%、卒業式73%と、65%近い開きがある。

どうやら先生方の服装は、卒業式のように格式ばっていないような印象を受ける。

図11 入学式の服装

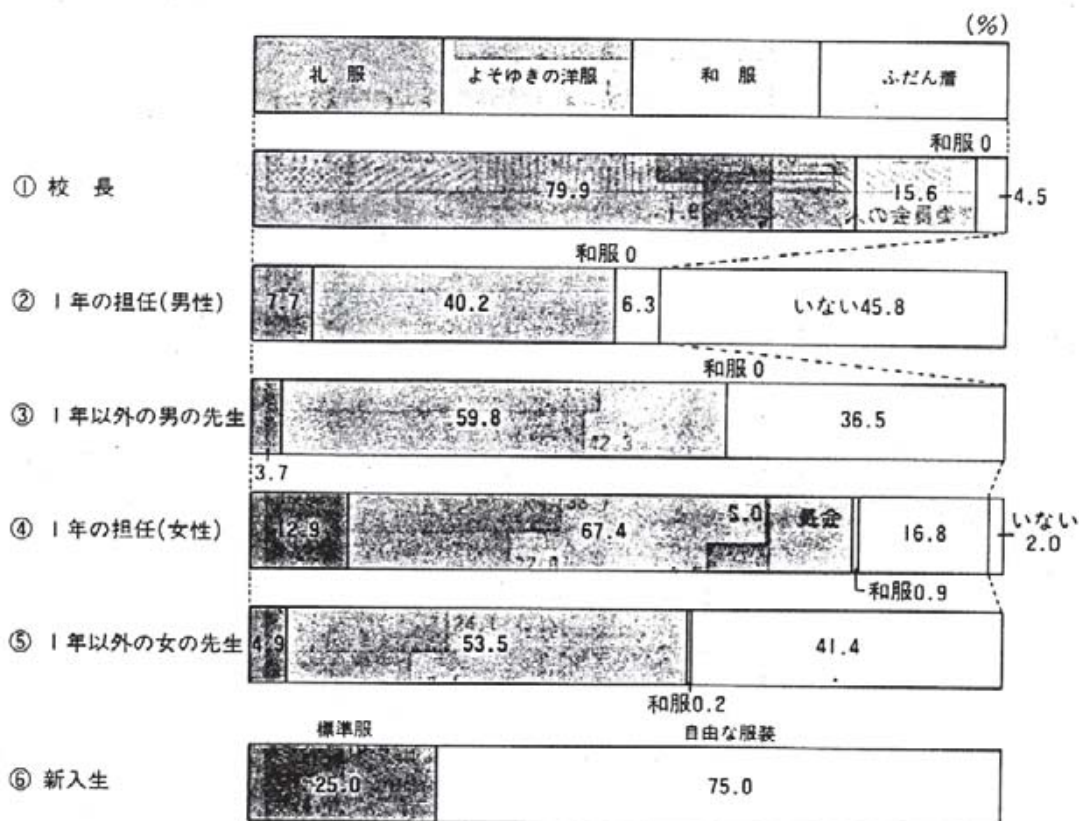
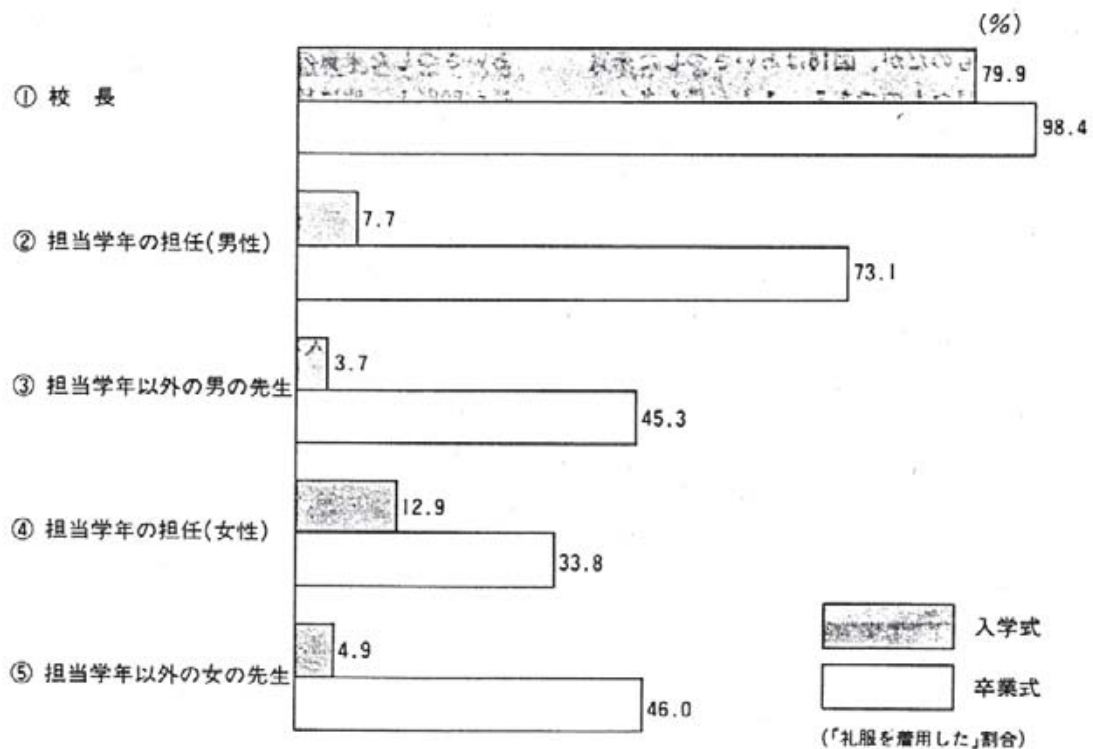


図12 入学式と卒業式の職員の服装(礼服)



これが平均的な入学式だ

会場が整い、参列者がそろったところで、いよいよ入学式が始まる。入学式はデータをもとに、日本で最も平均的な式を再現してみることとする。

まず、新入生の入場である。図13から、胸に花やりボンをつけている学校は53%で、つけていない学校よりわずかに多いことがわかる。次に一同敬礼(図14)は76%と、全体の4分の3の学校で行われている。

さて、式のクライマックスは卒業式の証書

授与に当たる新入生の呼名。そのようすを見てみよう。図15の①は呼名したかどうかたずねたものである。呼名した学校は40%と半分を割っており、一昔前に比べると、だいぶ減っているように思われる。大規模校では、一人ひとり呼名すると時間がかかる。長い時間辛抱することができない新入生の式だという状況を考えれば、当然の成り行きかもしれない。なお②は、呼名されたとき、80%以上の学校で、新入生が返事をして立つことを示し

ている。そして③は、80%以上の学校で、担任が新生の名前を呼んでいることを示している。

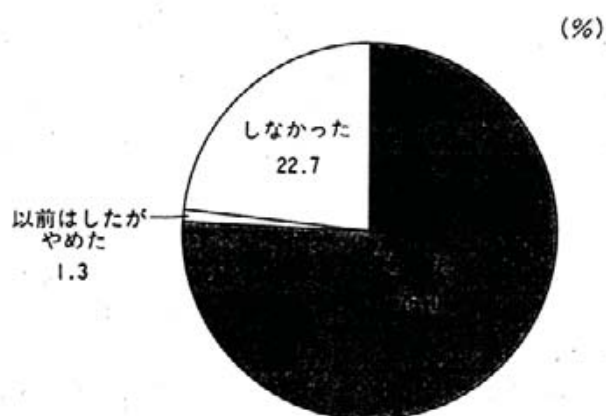
入学式から結婚式まで、式と言えばスピーチがつきものだが、図16はあいさつした来賓について見たものである。1人が最も多く、52%と過半数に達している。そのあと2人の30%、3人の15%と続く。1人から3人まで

ですでに97%と、ほぼ100%に近く、あいさつした人の数はあまり多くないと言える。このことも、新生を対象とした式であることを考えれば、妥当なところであろう。なお、あいさつした来賓の内訳を見ると、PTA会長が89%と、他に比べて非常に高い数値を示しているのが目につく。多くの学校では、PTA会長が来賓を代表してあいさつをして

図13 新生の入場のしかた
～胸に花やリボンをつけて入場したか～



図14 一同敬礼



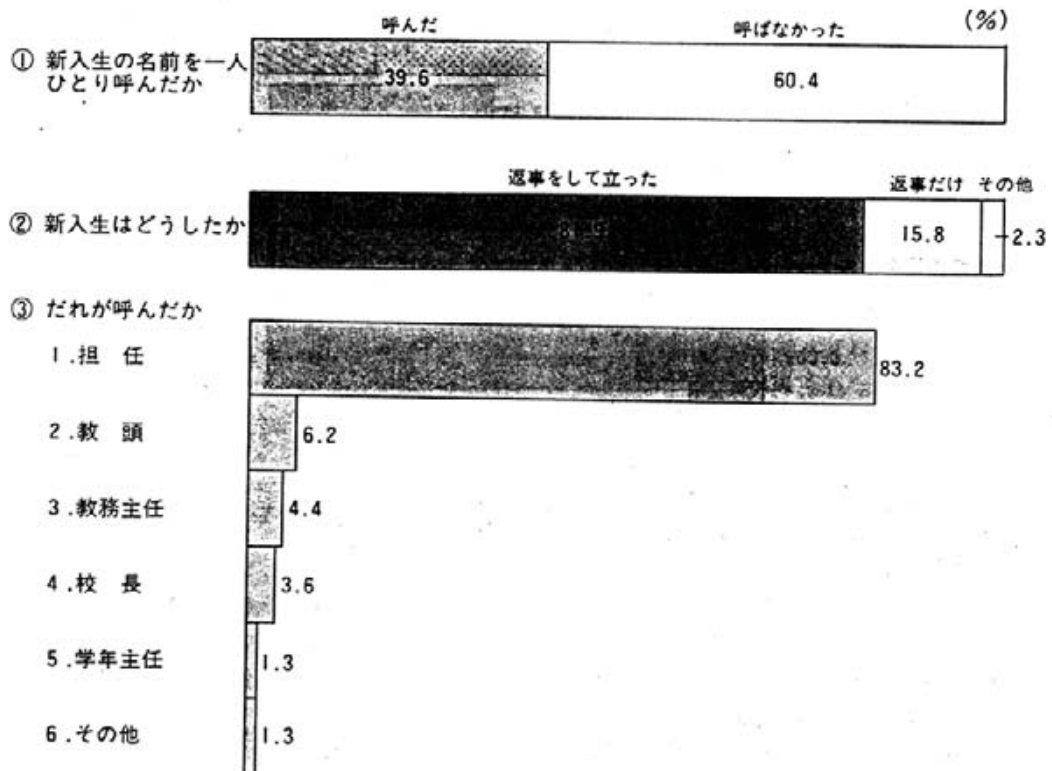
いる。

来賓があいさつをするのは慣行どおりとしても、在校生である子どもたちは、新入生のために何か楽しい迎え方をしているのだろうか。その結果が、図17の歓迎のことばである。最も多いのは「代表が（あいさつを）行った」の58%である。卒業式では主流となった「よびかけ形式」は22%しかなく、さらに進んだ

「歌や劇による」歓迎に至っては14%と、少数派にとどまっている。子どもたちもおとなと同様にあいさつをするのでは、新入生は飽きてしまいそうである。もう少し工夫のほしい気がする。

最後に、入学式で歌われた歌について見てみよう。図18が示すように、曲目数は2曲が44%と最も高く、これに1曲を加えると全体

図15 呼 名



の約4分の3に達する。ここで歌われた曲名は、89%の「校歌」が最も高く、ついで「君が代」の38%となっている。結局のところ、入学式で歌われる2曲の歌とは、「校歌」と「君が代」ということになってしまう。この2曲だけでは、まだ幼い新入生にとっては、身近に感じられる歌がなく、ややさびしい気がする。

以上のように、日本の平均的な入学式をデータから見てきた。その結果浮かび上がったのは、あいさつと決まりきった歓迎の仕方に特徴づけられる入学式であった。年度始めという忙しい時期に行われる式であることを考えると、仕方のない面もあろうが、新入生にとっては、いささか退屈な式であることはまちがいないように思える。

図16 あいさつした来賓

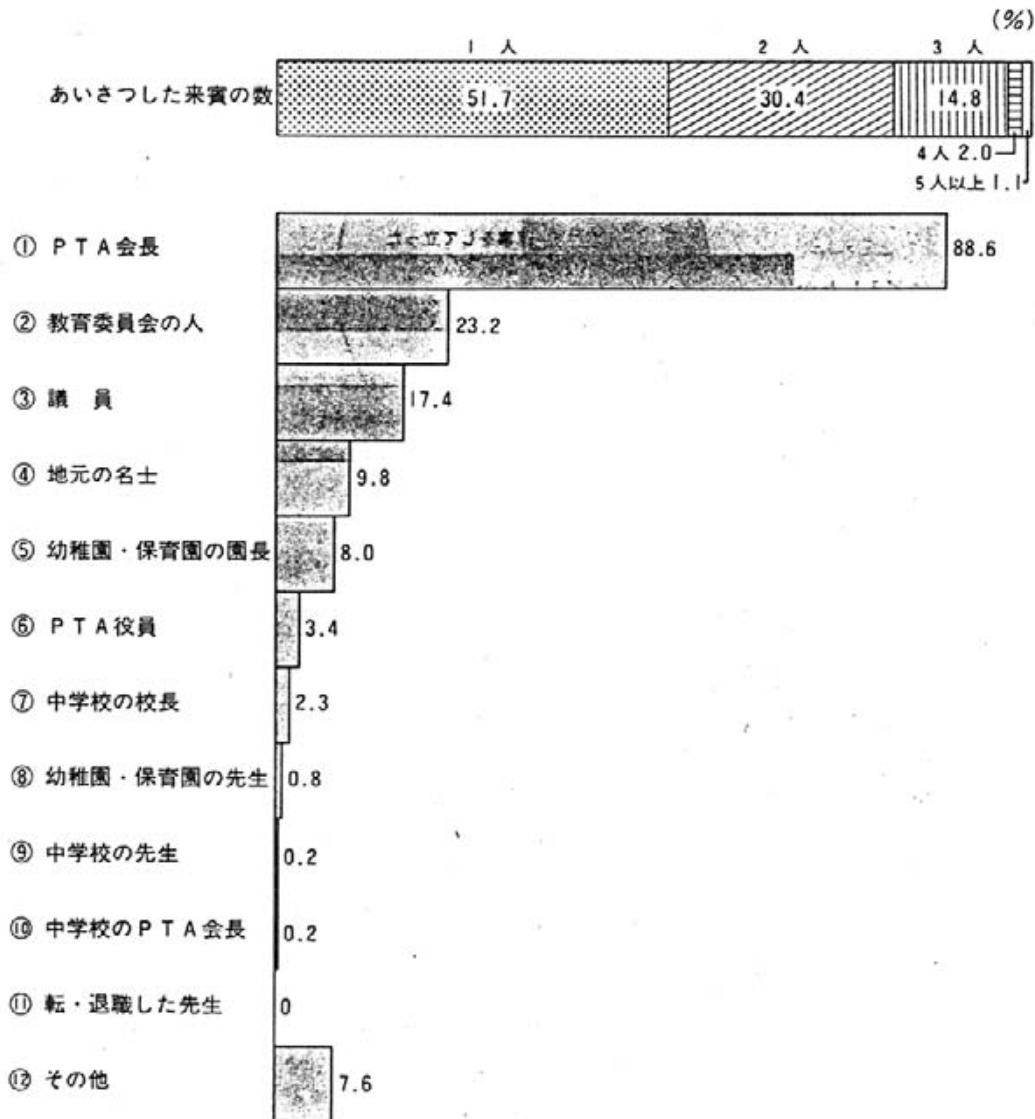
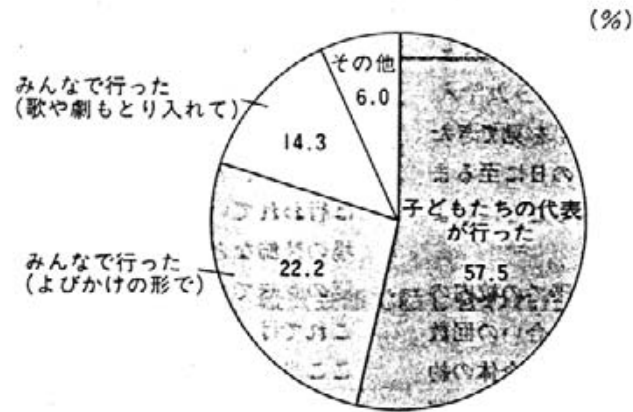


図17 歓迎のことば



子どもたちの代表の内わけ

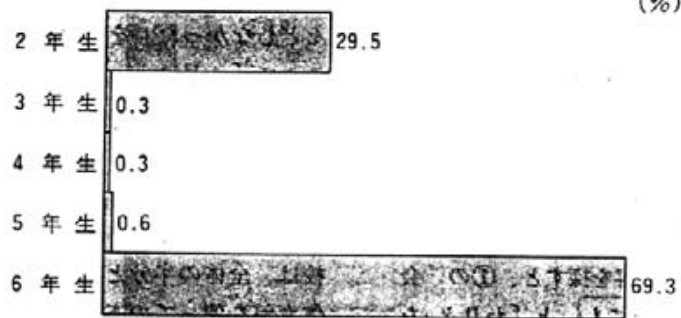
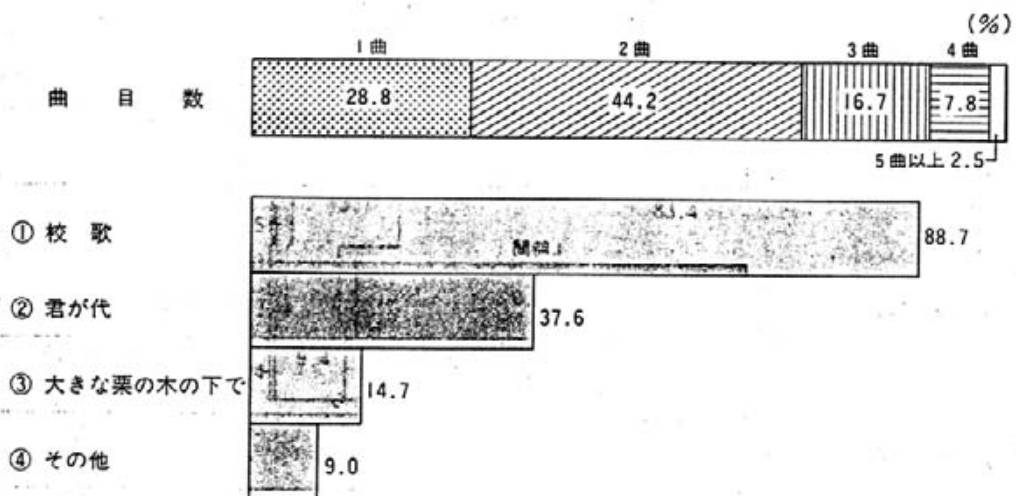


図18 入学式で歌った歌



ほとんど行われない話し合いと練習

これまで入学式の当日のようすを見てきたが、時間を少し巻き戻して、その日に至るまでの準備と練習について見てみることにしよう。

まず図19は、入学式の計画段階での校内の話し合いを見たものである。話し合いの回数は、1～2回の学校がほとんどで、全体の約9割に達している。また話し合いの合計時間も、1時間の学校が過半数に達しており、2時間まで加えると8割を越えてしまう。さらに、話し合いの時期も、「4月から」という学校が22%もあり、1カ月前の「3月から」という学校と合わせると、全体の4分の3になる。話し合いは、意外なほど簡単に済まされている。

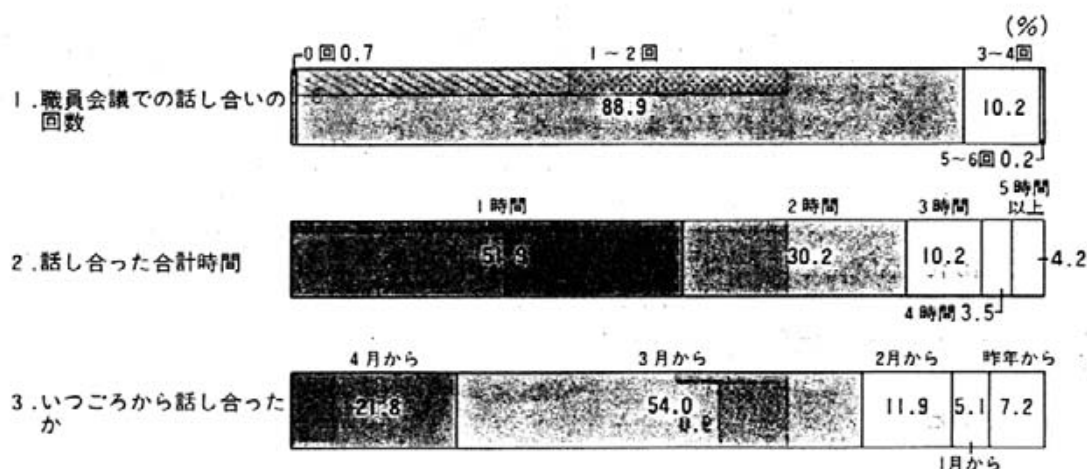
それでは、その話し合いの内容はどうなっているのか、図20から見てみよう。

わりと話し合われた内容を探すと、①の「会場の装飾」が31%（「とても」と「わりと」を加えた数値）で最も高く、他の内容は3割にも満たない。特に⑦の「君が代」以降の内容

では、わずか数パーセントである。ほとんどの学校で、入学式についての真剣な話し合いは行われていないと言えよう。せいぜい、会場の装飾などのいくつかの内容について、確認の意味での話し合いが行われる程度である。これでは、形式化されたやや退屈な入学式は、ここ当分変わりそうもない。

では、こうした話し合いの後に行われる練習はどうなっているのだろうか。図21は、そのようすを見たものである。まず練習を始めた時期だが、「4月に入ってから」と「ほとんどしなかった」を合わせると51%になる。ここで「4月に入ってから」と回答した学校も、入学式が行われた日が4月7日前後で、始業式がその2～3日前であることを考えると、ほとんど練習をしていないと解釈してよいであろう。結局、練習らしい練習をした学校は、全体の半分ということになる。さらに、体育館を使っての本格的な練習をしなかった学校が64%、予行練習をしなかった学校が83%に達していることも、一連の数値として受

図19 入学式の話し合い



けとめることができる。

このように入学式に関しては、ほとんど練習らしい練習をしていないという事実が明らかになった。確かに、年度末から年度始めの大切な時期に、入学式の練習のために多くの時間を割く必要があるかどうかは疑問である。それに、クラスがえがあったり、教員の入れ

かえもあって、年度末からの取り組みを行いくいのもたしかであろう。したがって、このままでよい、あるいは仕方がないようにも思える。しかし反面、練習が行われない背景には、入学式そのものがパターン化し、学校関係者がそれに慣れてしまったためとも考えられる。

図20 職員会議で話し合われた内容

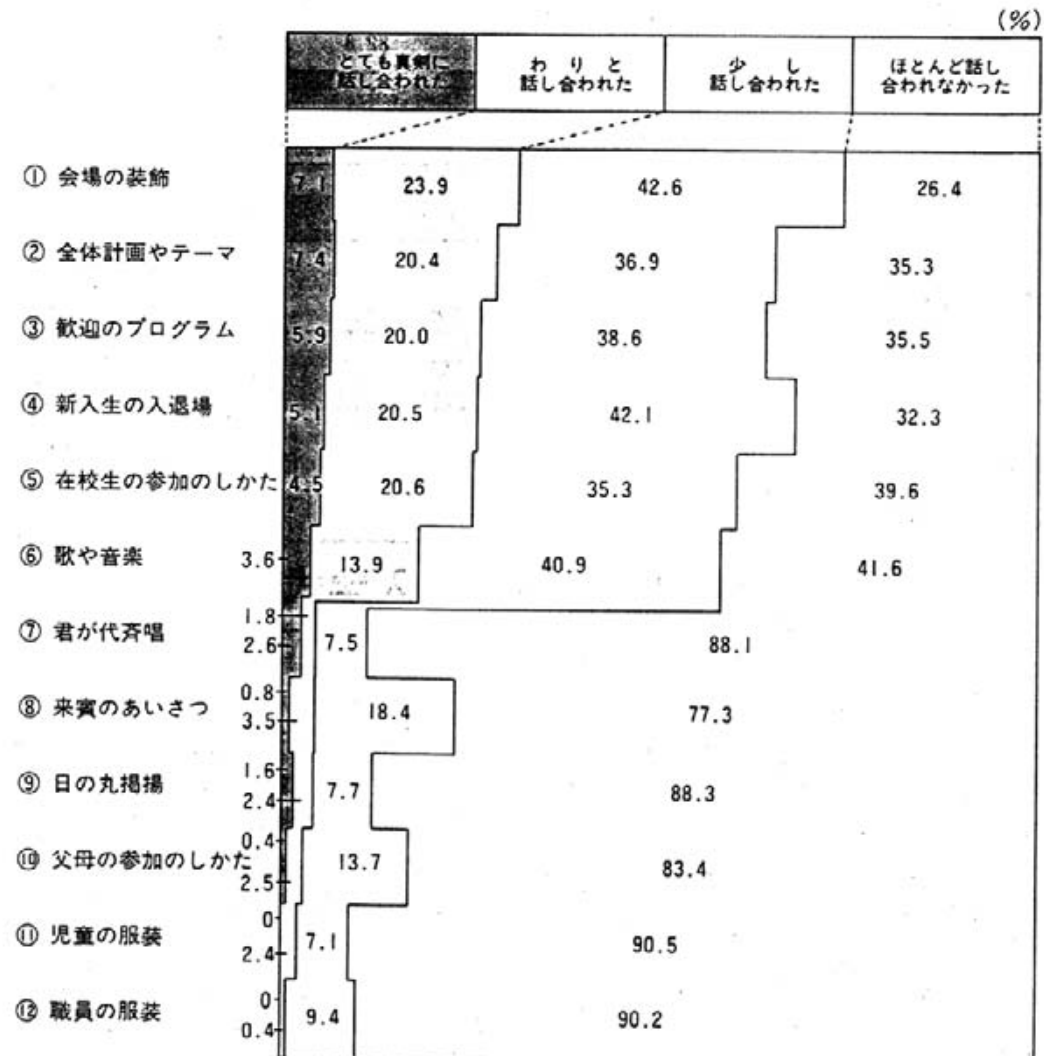


図21 入学式の練習



変わりばえない入学式

最後に、入学式のこれからの見通しについてふれて、1章のしめくりとしよう。

これまでのところで、パターン化された入学式の姿がだいぶ見えてきたが、図22は昨年と比べての変化という観点から、そのことをもう一度見直したものである。図中の色の濃い部分が示すように、昨年からの変化は、ほとんどとって見受けられない。「一部変わった」まで含めても、①「歌や音楽」の26%が最高である。「大きく変わった」に至っては、すべての項目にわたって、ほとんど0%に近い。いかに入学式が固定化・パターン化しているかが、この図からよくわかる。

ではこういった入学式を、学校ではどうとらえているのだろうか。図23は、式のイメージという点から、図24は入学式の満足度という点から、それぞれ見たものである。

図23からは、卒業式ほどではないにしろ、入学式を伝統的な式としてとらえているようすがわかる。ここで「どちらかといえば伝統的」と「どちらともいえない」と答えた数値が、卒業式よりも高いことに着目してほしい。それだけ、入学式のほうが伝統性への性格づけがあいまいになっているわけだ。

さらに図24を見ると、現在の入学式に満足しているとする数値が94%と非常に高いが、

「とても満足している」だけ見ると、12%と意外に低く、手放して評価しているわけではないことがわかる。

このへんに、これからの入学式が変わっていく可能性が秘められているように思う。しかし、それはあくまでも可能性であって、現実には、変わりばえしない、パターン化した式が来年度も持たれる可能性が強い。これは

蛇足かもしれないが、図25の式の準備を見ると、約7割の学校が、準備は「大変でなかった」と答えている。この数値を見る限り、入学式の準備については先生方に余力が残されており、先生方の意識さえ変われば、式の個性化や子どもの活動化の方向で、改善することができるように思われてならない。

図22 昨年と比べて変化したこと

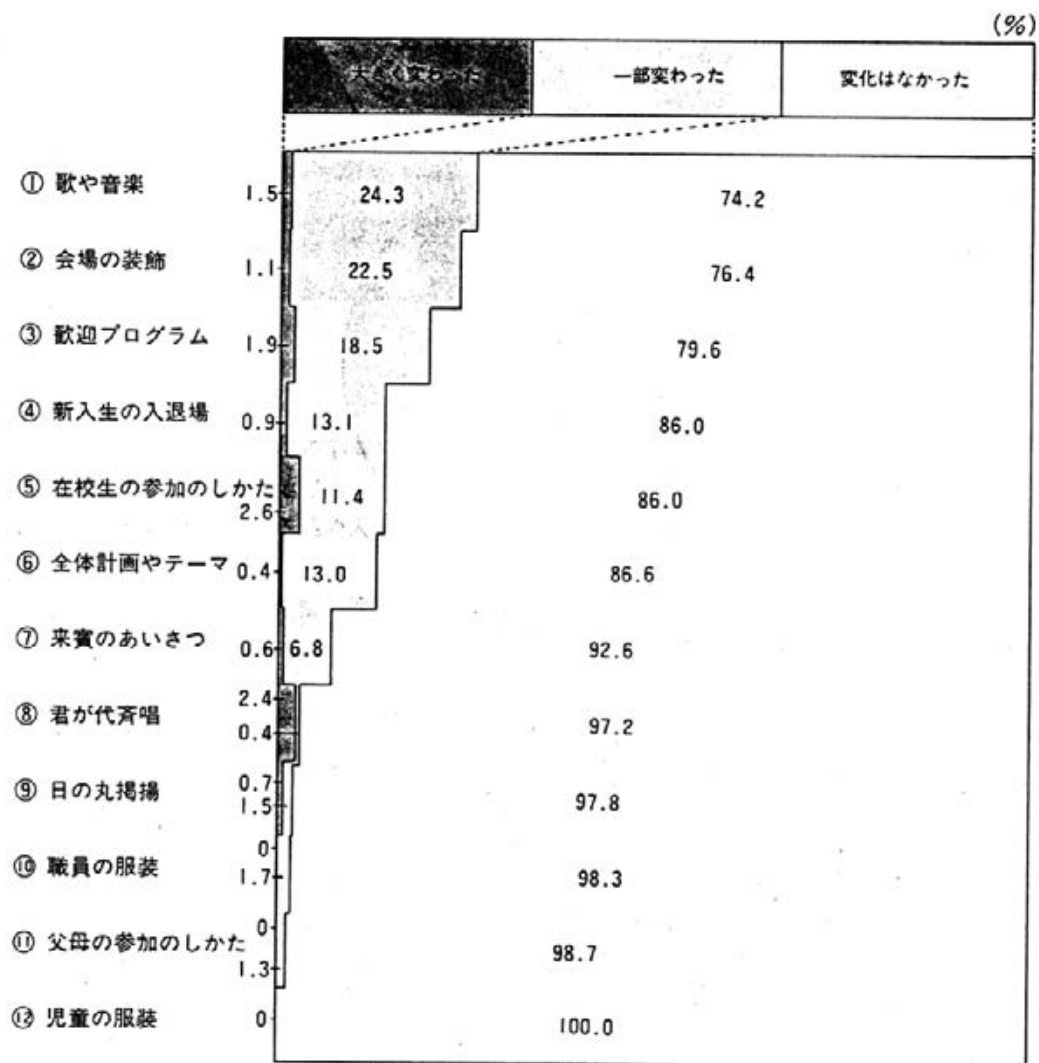


図23 式のイメージ

(%)

	伝統的なスタイルの	どちらかといえば伝統的な	どちらともいえない	どちらかといえば新しい感じ	新しい感じの式
入学式	6.9	51.8	21.0	13.5	6.8
卒業式	30.0	36.2	13.0	15.1	5.6

図24 入学式の満足度

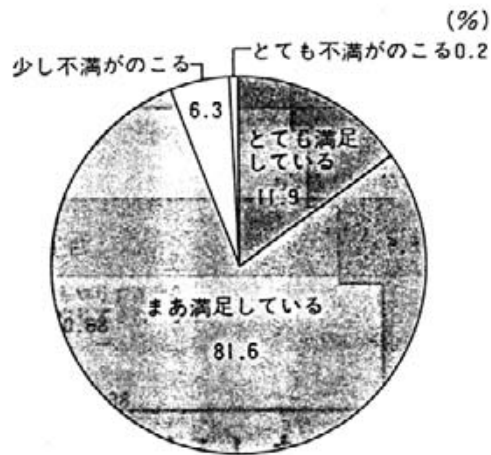


図25 式の準備



2. 各地の入学式



1章では、全国の小学校の卒業式の様子を概観した。2章では、地方別のデータを基に、地域差に目を向け、各地の入学式の様子を探ってみることにする。

なお、地方別の調査協力校は地図1のとおり

りである。(四国・九州地方については、調査票の回収率が悪く、調査校が少なくなってしまったのを、あらかじめおことわりしておく)

会場のようす

入学式の会場のようすが、卒業式の会場と似通い、旗立台には校旗、壁には日の丸、壇上には大きな生け花が、そして紅白幕で会場全体を包み込むようにしていることは、すでに見て来たとおりである。

この会場のようすの中で、どんな点に地域的な違いが見られるのであろうか。

まず、紅白幕について調べた結果が地図2である。地図が示すように、北海道、東北地

方で紅白幕を使う割合が高く、西へ行くにしたがって姿を消していくという興味ある傾向を示している。

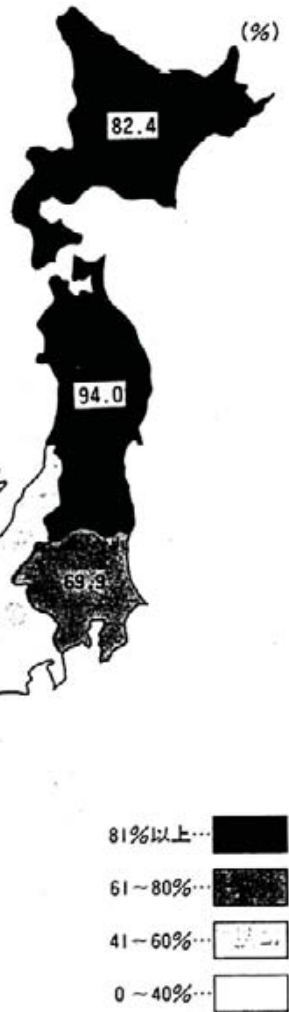
入学式でも、日の丸を掲げる学校は多く、地図3からは、北海道が最もこの率が低い。

学校によっては、日の丸、校旗とともに、市町村旗を掲げるところもあり、地域的には、北海道・東北・関東でその傾向が強いことが、地図4からうかがえる。

地図1 地方別調査校 553校 (県名無記入11校)



地図2
紅白幕を使ったか



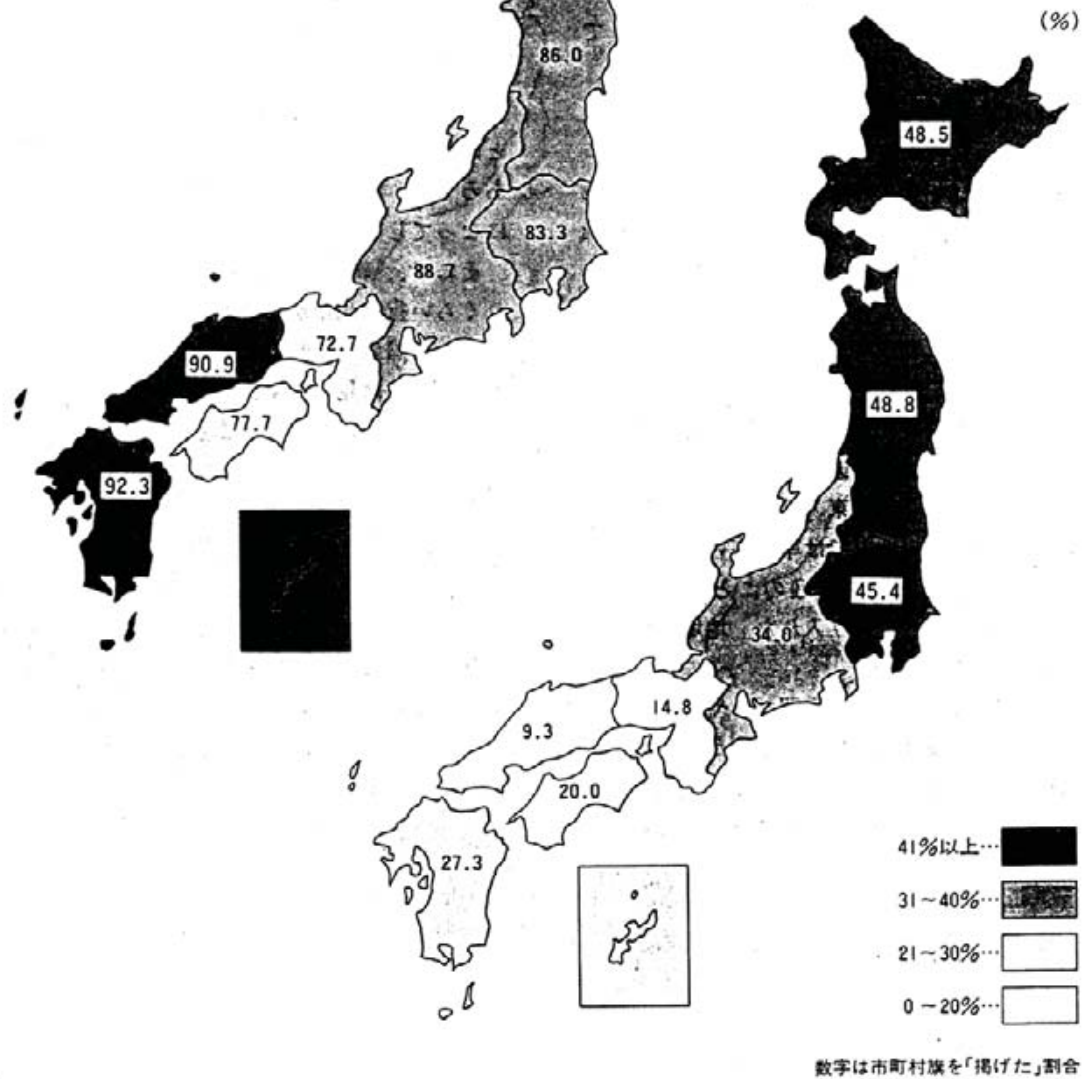
数字は紅白幕を「使った」割合

地図3 日の丸を掲げたか



地図4

市町村旗を掲げたか



新入生の服装

新入生の服装は、自由な服装のところが多いが、地図5からは、中国地方で標準服の割合が93%と群をぬいて高く、北海道・東北・関東地方では、この率が低い。

新入生の胸に花やリボンをつけるのは、四国・中国・九州地方の割合が高く、その他の地域は、ほぼ2校に1校の割合であることを地図6が示している。

式の雰囲気

地図7は、「一同敬礼をしたかどうか」である。こうした礼の仕方で式を始めるのは、初めて小学校の門をくぐり、ただでさえ緊張している新入生にはそぐわない感があるが、実際には、かなりの地域で行われている。地図7が示すように、北海道が最もこの率が低く、5割に満たないが、他の地域ではほとんどで7割を越えている。

新入生には歌うのがむずかしいと思われる「君が代」を歌った地域は、地図8のとおりである。一同敬礼と同様に、北海道では、この歌を歌う率が最も低い。その他、歌う率が低いのは、東北・関東・近畿地方で、逆に中国・四国・九州地方では率が高い。

次に、地図9は、「歓迎のことばによびかけや歌・劇などをとり入れた」地域について調べたものである。

入学式だけに、式の雰囲気をやわらげる取り組みを学校は考えていく必要があると思うが、歓迎のことばによびかけや歌・劇などをとり入れる地域は、全体的に低く、この率の

最も高い近畿地方でも45%である。

学校生活のスタートを切る子どもたちを迎える入学式だからこそ、形式ばらず、学校ごとに新しい試みや工夫がなされるべきなのだろうが、実際には、各地域とも形式的な式になってしまっているような感触を受ける。

そこで、「新しい雰囲気」の式が各地でどれくらい行われたかまとめたのが、地図10である。四国地方でやや割合が高いが、とくに地域的特色は見られず、全体としては、新しい式への取り組みは、どこも消極的なようである。

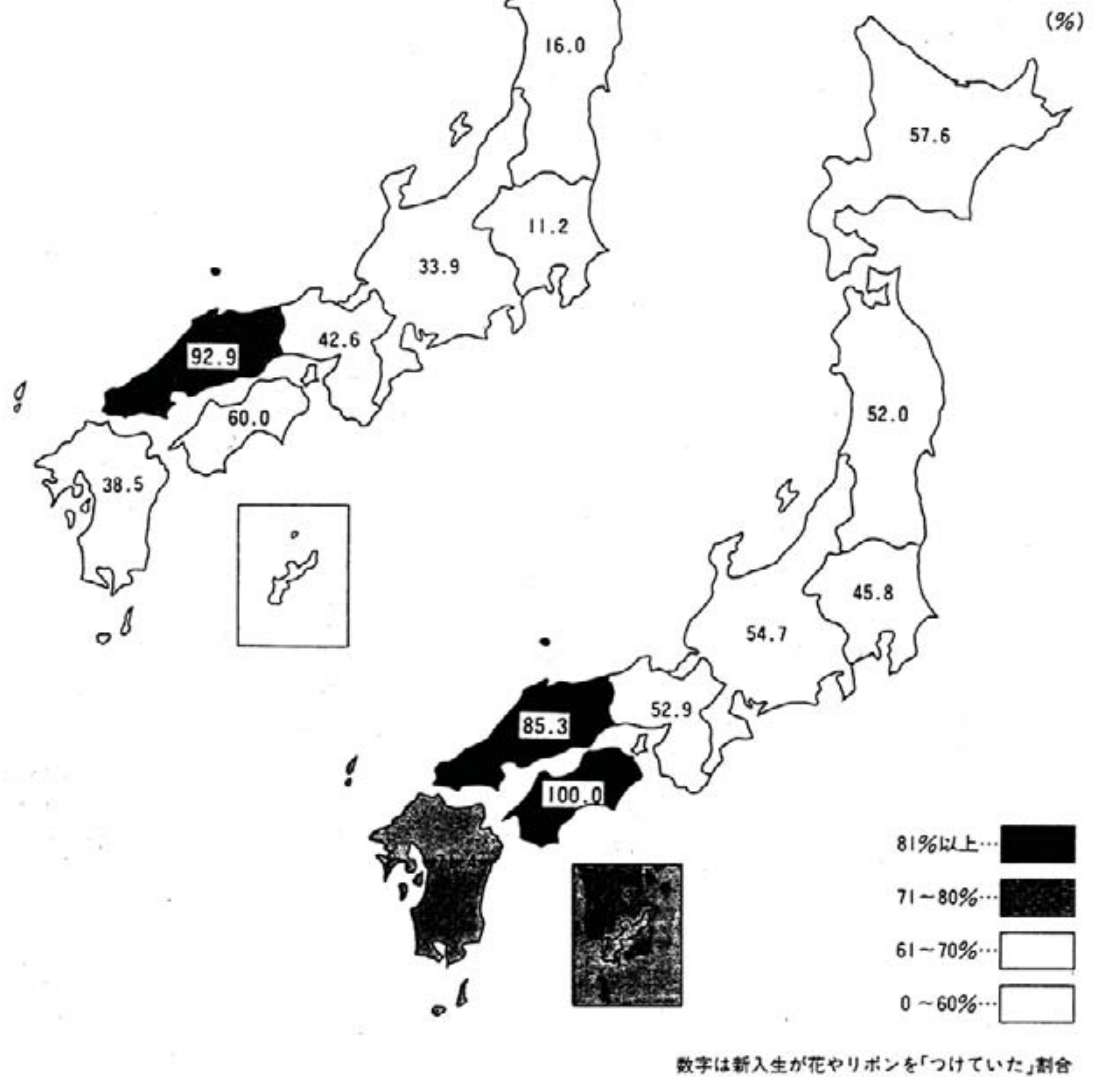
各地の入学式といっても、データで見る限り、各項目によっては地域的な違いが見られたが、全体的にはかなり似かよった傾向であると言えそうである。このような傾向を示す要因はいろいろあると考えられるが、それを乗り越え、新しい感覚で入学式を見直し、各地でさまざまな取り組みが試みられることが期待されよう。

地図5 新入生の服装(標準服)



地図6

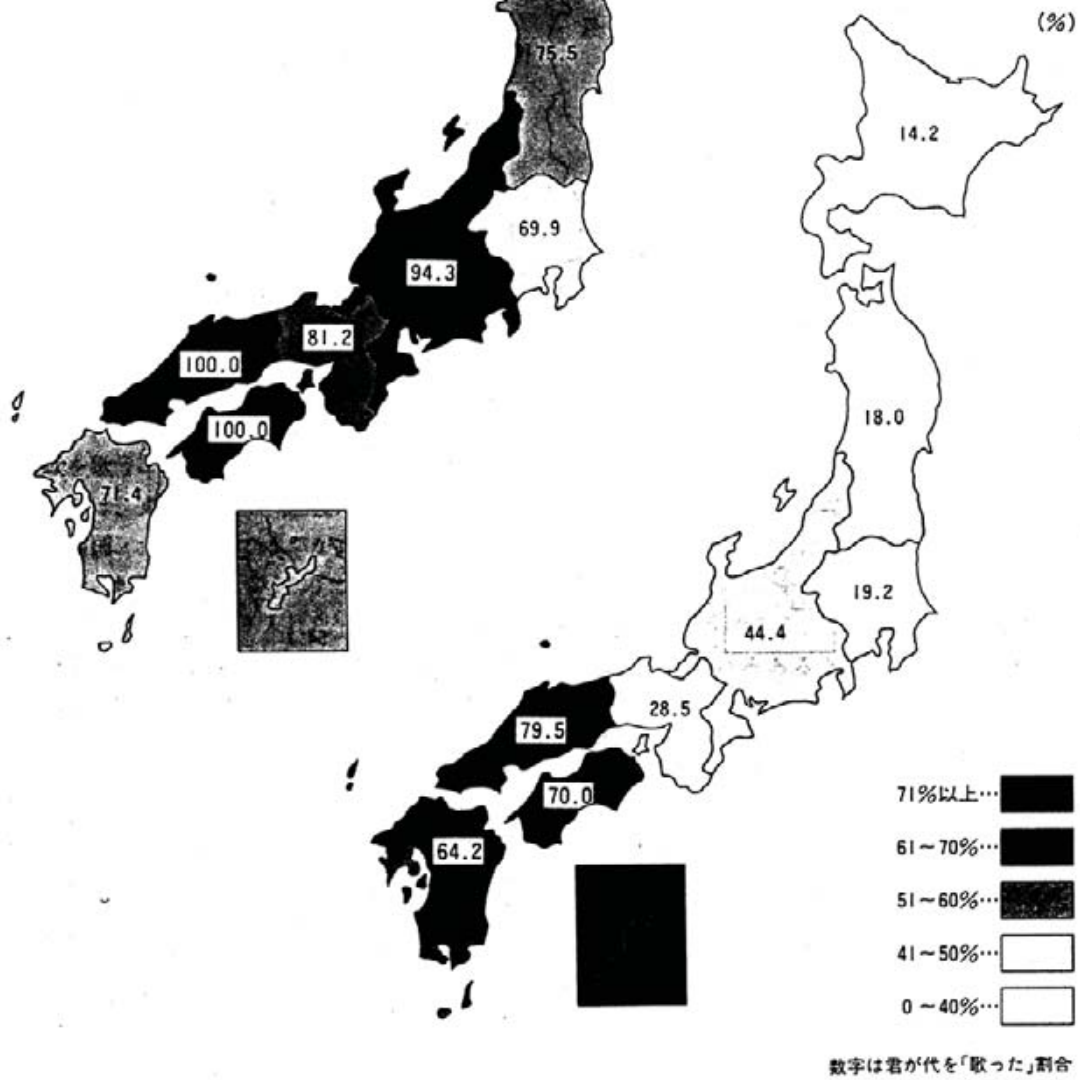
新入生の胸に花や
リボンがついているか



地図7 一同敬礼をしたか



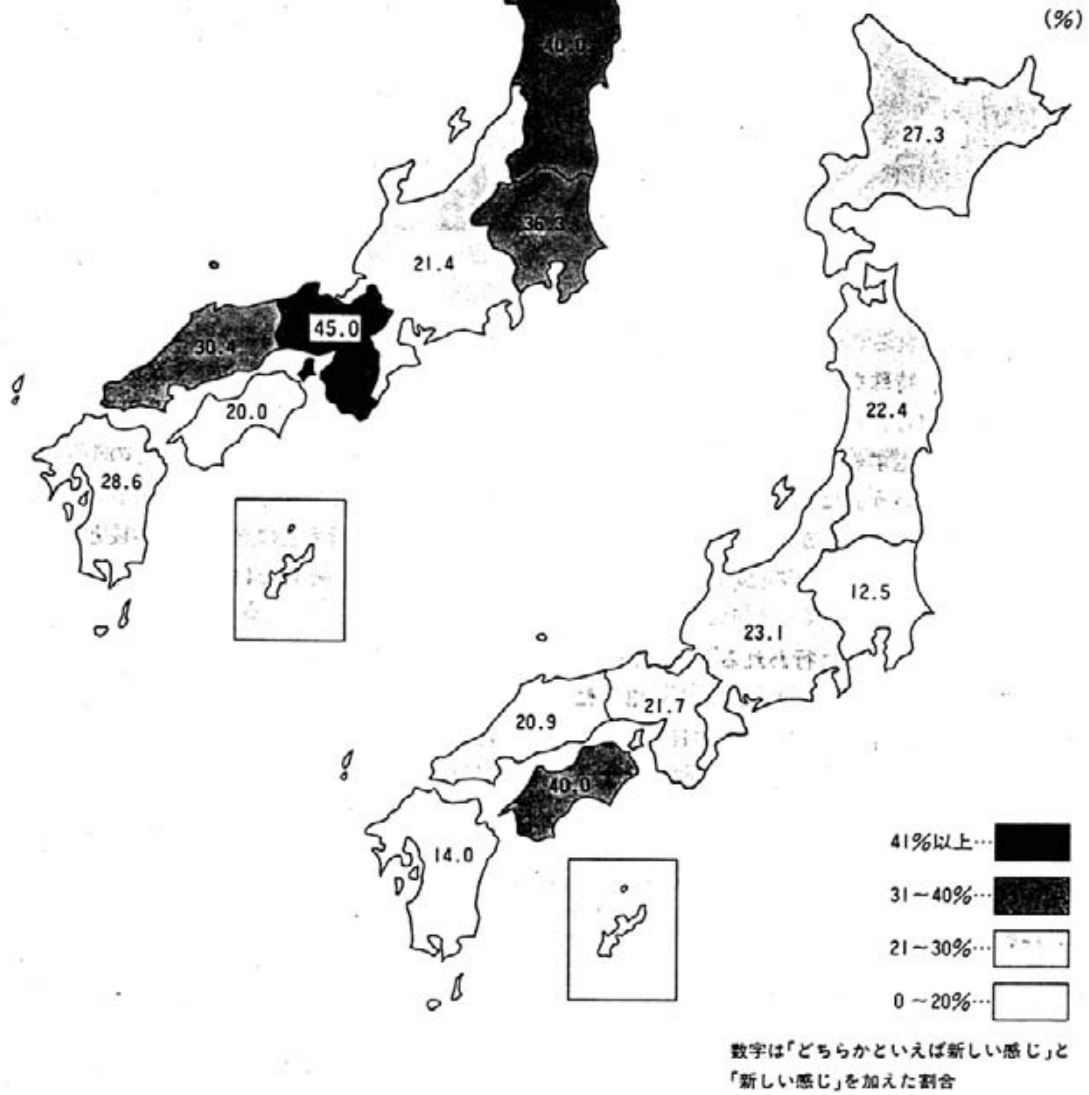
地図8
君が代を歌ったか



地図9 歓迎のことばによびかけや歌・劇などをとり入れたか



地図10 式の雰囲気は新しかったか



3. 特色ある入学式



学校で行われるさまざまな儀式の中で、入学式だけは、特殊な性格をもつ。それは、当然のことながら、入学式の主体者が新入生であることから生ずる。そのために、主体者をお迎えするという式になる。いかにしてお客様を迎えるかというのが入学式の狙いとなる。主体者が関われないところに、入学式のむずかしさがある。

もう一つは、4月に行われるということからも、入学式のむずかしさが加わる。3月に卒業式を終え、4月、新学期の初日である。したがって、新入生のお迎えの準備をしよう

にも、準備にかかる時間がないのが実情である。

しかし、入学式が、入学してくる児童にとっても父母にとっても、これからの小学校生活6年間の記念すべき第一歩であることに変わりはない。新入生にとっては学校との初対面の日である。それだけに、入学式を大切な1日としたい。

そこで、さまざまな学校での取り組みの例をあげながら入学式の価値を考え、入学式を再検討してみようとしたのが本章である。

入学式の工夫

まず、学校の担当者にそれぞれの入学式の特色について回答を求めたので、それらを以下の(1)~(6)のカテゴリーに整理することにし

た。

(1)の内容の工夫は、式の中での在校生の歓迎のしかたに特色を出そうとしている事例で

ある。スライドやパネルの利用は、当然とはいえ、もっと多用されてよいように思う。(2)の入・退場では、新入生が中央壇上より入場してくるものが目新しいし、花のアーチもその子にとって一生の思い出となる入学式となろう。(3)の話し方から、新入生に対して、やわらかい雰囲気を出そうとしているようすが浮かんでくる。中でも、腹話術を使って、などのあたりに、ほほえましさを感じる。また、(4)のように入学式を通して、1級先輩となる2年生と、新しく最上級生となった6年生について、その自覚をうながすことに価値を置いて行われている事例も認められる。さらに(5)では、儀式と歓迎会の切り替えを図っている実践である。その一方、(6)のように、なるべく簡単に入学式をすませてもらおうとしている学校も見受けられる。

(1) 内容の工夫

- 在校生の歓迎のことば、歓迎会
 - 1つ年上の2年生(全員)が歓迎の歌と器楽演奏を行い、その中に歓迎のよびかけ(歓迎のことばとして)を入れて、なごやかな雰囲気をつくるようにしている。
- 点呼の折り、新入生に花一輪ずつ6年生と2年生が渡す。
- 児童会の代表が、お祝いの挨拶と共に代表的な校内行事について、パネルで説明する。
- 6年生の迎えのことばをよびかけ形式にし、親しみ易くしている。
- 小学校生活のようすをスライドで紹介した。
- 新入生が、ステージ上で一人ひとり自己紹介する。
- 入学式の最後に、全校生によるお祝いの合奏(春の小川、おもちゃのチャチャチャ、夕やけこやけ、春がきた)をした。
- 入学式の中で、入学児童と全校児童とのふれ合いのため、フォークダンスをしている。
- 6年生が新入生のまわりを囲んで、「おつかいありさん」「小鳥の歌」を歌ったり、よびかけをした。
- 鼓笛隊の上級生が、演奏をする。

- 2年生に参加してもらい、1年生の1年間の活動のようすを発表し、1年の成長ぶりを見せる。
- 6年生の歓迎のことばを、学校行事を中心にした劇とした。

(2) 入・退場の工夫

- 1年の補助先生の引率で、保護者に子どもが見えるよう、中央壇上より入場、着席する。
- 花のアーチの下を、新1年生が入場する。
- 新入生は親と手をつなぎ、在校生の手のアーチをくぐり、退場。
- 来賓・6年生・職員で欽送アーチを作り、式終了後、その中をくぐらせて送る。

(3) 話し方の工夫

- 学級担任のあいさつに人形を使用して、あいさつやことばづかい、良い習慣などの説明や、子供とのやりとりを行った。
- 校長の話に入学生が傾聴するよう、その内容や腹話術を工夫してみた。
- 一人ひとりの児童の名前を読み上げるとき、担任は1人ずつ握手。
- 「形式ばらずに、やわらかい雰囲気」をモットーに、とくに司会者のことばなどに配慮。

(4) 在校生としての自覚を

- 入学式の会場を、新6年生によってきれいに装飾する。
- 入・退場に際し、2年生の演奏によって行進、親しみとやわらかな雰囲気をつくる。一方2年生には、上級生としての自覚を促す。
- 1年と6年で相棒を組み、すべて6年生がお世話する。
- 受付後、6年生が1人ずつ新入生を連れて学校案内し、新入生の質問にも答え、人間関係づくりや新入生に夢や期待を持たせるような話をする。案内説明や話す内容については、児童会で打ち合わせる。(担当指

- 導)
- 全校生が何らかの形で参加した絵、〈入学おめでとう〉などを1年生の教室の前のカベ(廊下)に掲示する。
 - 新2年生に進級を自覚させることもねらって、歓迎のことばや歌を歌わせる。新6年生にも、最上級生となったことを自覚させるため、歓迎のことばや歌や器楽演奏で迎えさせる。

(5) 儀式と歓迎会を区別して

- 儀式としての部分と、温かく新入生を迎える部分とに分けて実施した。
- 第1部 式典
第2部 お迎えの会(2年生の劇やお迎えのことば)
- 入学式後に2年生が迎える会を行い、歌・

合奏・ダンス・学校生活の1年間を劇化するなどして紹介し、終了後、全校児童が、校庭で迎える会(児童会)でお祝いをする。(お祝いカードや折り紙の首かざりなどを贈る)

- 儀式だから、児童の態度をピリッと集中させようという事に重点をおいた。

(6) 簡略化の方向で

- 短時間で終わるように、祝辞その他話す内容を短い時間で簡潔にすることを実行した。
- 卒業式の会場をそのまま利用した。
- 来賓の挨拶は、できるだけ短くお願いした。
- 短時間で楽しい雰囲気を出すよう配慮した。
- 特に工夫らしいものはなかった。しかし、なるべく短時間にすることを心がけた。

式次第

各学校の式次第をみていくと、ほとんど変化は見られないが、儀式として入学式を行うとしている学校と、入学を祝う会としての式を持つとしている学校とに大きく2分されている。

まず、儀式的な雰囲気の強い学校の例として、(1)と(2)をあげた。(1)は綿密につくりあげ

ているものであり、(2)は、簡略化の方向で考えているものである。(1)では、お祝いのことば、来賓紹介、保護者あいさつなどに多くの時間が費やされている。それらをすべてなくしたものが(2)である。両者共に、児童の姿がほとんどみられないのが特徴的である。

(1) 念の入った式次第

○一同入場	
○新入児童入場	
一同敬礼	7. 来賓紹介及び祝電披露
1. はじめのことば	8. 児童代表歓迎のことば
2. 君が代斉唱	9. 新入児童保護者代表あいさつ
3. 入学児童呼名	10. 職員紹介
4. 校長先生のお話	11. 校歌斉唱
5. 教科書贈呈	12. おわりのことば
6. 来賓お祝いのことば	一同敬礼
●教育委員会	
●町長	○新入児童退場
●議会代表	○一同退場
●PTA会長	

(2) 簡略化された式次第

- 一同礼
- 開会のことば教頭
- 校長先生のお話（含、担任発表）
- 教育会会長お祝いのことば
- 校歌の紹介（テープ）
- 閉式のことば教頭
- 一同礼

それに対して(3)、(4)は、在校生や新入生が式の中に登場し、歓迎会的な要素が盛り込まれている。さらに(5)は、入学式を儀式と歓迎会に分け、2部構成で行われている。

(3) 在校生の歓迎の歌やあいさつがある

- | | |
|------------------|----------------|
| ○在校生、来賓入場 | 寸劇風に（児童会役員） |
| ○新1年生、保護者入場 | 6. 来賓あいさつと祝電 |
| 歌「めだかのがっこう」と拍手 | 7. 校歌斉唱 |
| | 8. おわりのことば（教頭） |
| 1. はじめのことば（教頭） | 9. くす玉わり |
| 2. 学校長の話 | |
| 3. 1年生担任紹介（校長） | ○新1年生、保護者退場 |
| 4. 担任あいさつ | 歌「友だちのうた」と拍手 |
| 5. おめでとう1年生 | ○在校生退場 |
| （歓迎のことば 学校生活を紹介） | |

(4) 新入生が登場する

- (1) 1年生入場（拍手で迎える）
- (2) 開式の言葉
- (3) 敬礼
- (4) 校長先生のお話
- (5) 児童代表の言葉（6年生）
- (6) 2～6年生の歌
- (7) 1年生の歌（1年代表の言葉を入れる）
- (8) 閉式の言葉
- (9) 敬礼
- (10) 1年生退場（2～6年生のトンネルをくぐりながら）

(5) 式と歓迎会の二部構成になっている

<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会のことば 2. 校歌斉唱 3. 校長先生のお話 4. 1年担任紹介 5. 教育委員会祝辞 6. 来賓のお祝いのことば 来賓紹介 祝電披露 	<p>〈そのあと児童会主催〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 在校生歓迎のことば 6年生代表のことば 2年生の歌 6年生のおどり 花束贈呈（2年代表→1年各組代表へ）
--	---

最後に、入学式にかかる時間をみたものが次の(6)である。これは、調査協力校の式次第の中では、わりと一般的なものである。式の開始10時の45分前から保護者の受付をはじめ、

式は30分間で終了するが、その後、学級指導、記念撮影などがあり、児童の最終下校は12時である。

(6) 式にかかる時間

- 式次第 司会、教務主任
- 保護者入場 9:15～9:30
 - 6年生入場 ～9:45
 - 教職員、来賓入場 ～9:50
 - 新入児入場 ～9:55（6年児童誘導 プラカード、5人ずつ4クラス）

内 容	時 間	留 意 事 項
(1)開会のことば 1'	10:00～	
(2)校歌斉唱 3'	10:04	ブラスバンド
(3)校長先生のはなし 3'	10:07	
(4)職員紹介と1年担任発表 3'	10:10	
(5)1年担任代表あいさつ 3'	10:13	学年主任（ ）
(6)PTA会長のお祝いのことば 並びに祝電披露 3'	10:16	
(7)児童会長歓迎のことば 2'	10:18	児童会長（ ）
(8)1年生代表のことばと合唱 2'	10:20	1年児童代表（ ）
(9)保護者代表あいさつ 3'	10:23	保護者代表（ ）
(10)全員合唱「手のひらを太陽に」 3'	10:26	1番は新入児のみ、2、3番は全員
(11)閉式のことば 1'	10:27	

- 新入児童退場
- 学級指導 10:40～11:10
- 入学記念写真撮影
（保護者、児童、職員）11:15～11:45
- 児童最終下校 12:00

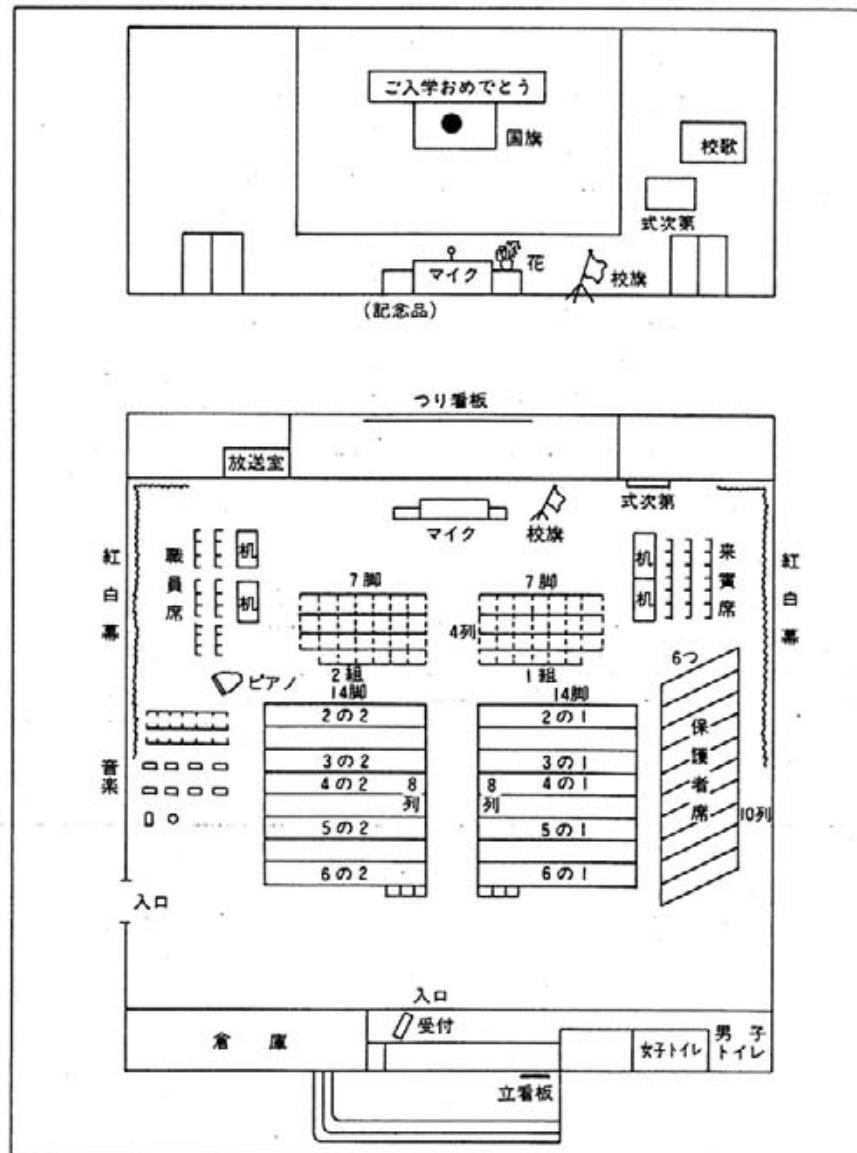
会場の工夫

入学式の会場図の中で、一番多かったものが(1)である。(2)にあげたように、卒業式を入学式に、卒業生を新入生に変えると、このような隊形になる。

学校は、卒業式のあと春休みになり、続いて入学式。そのへんの事情を考えると、これ

が一番らくな隊形であろう。しかし、入学式と卒業式のもつ意味を比較して考えると、もう少し工夫していかなければならないと思える。その気になれば、会場の形を変えるのは短時間で済むのだから。

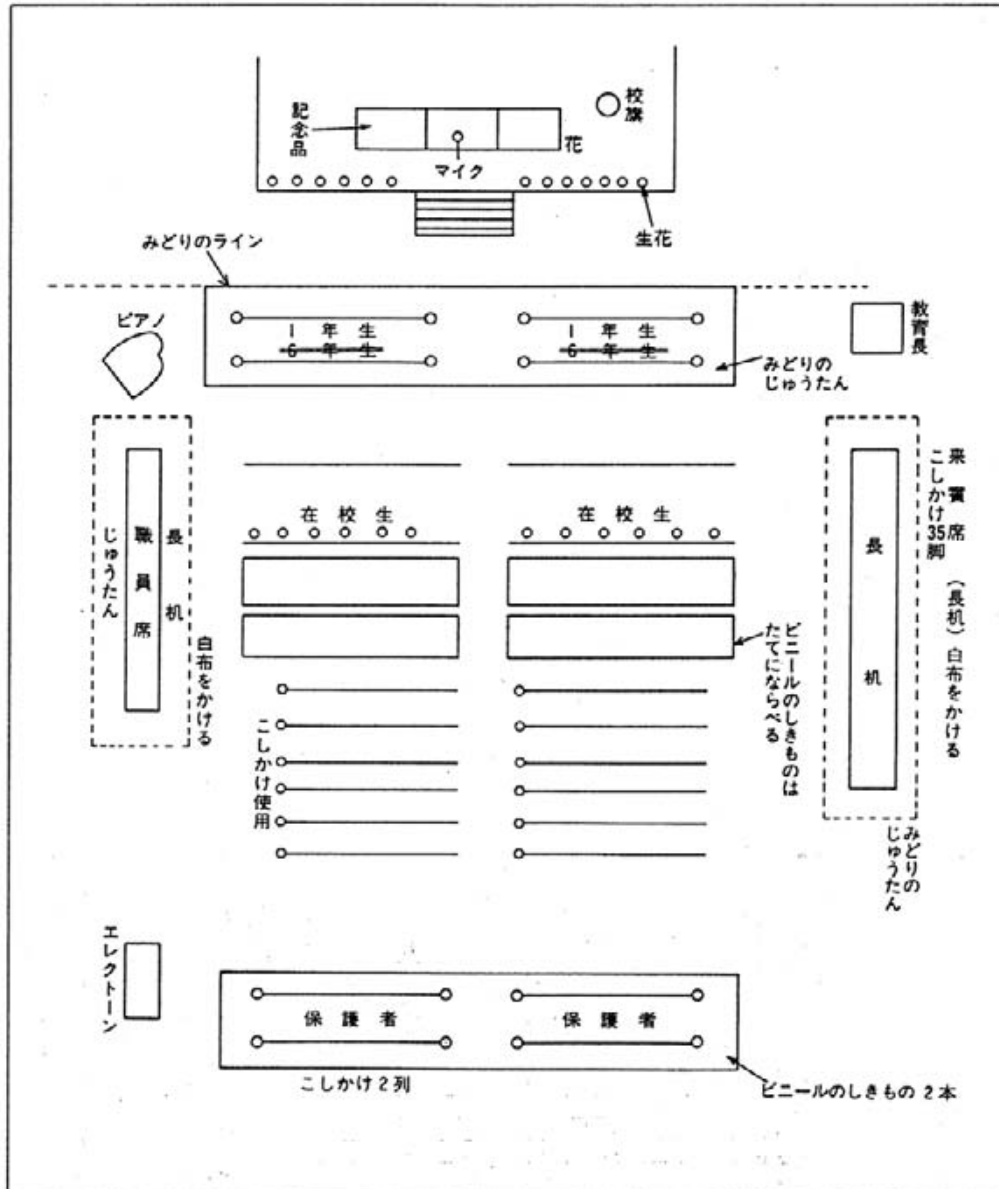
(1) 一般的スタイル



(2) 卒業式の会場をそのまま入学式に

入学式
卒業式場の作り方

(注)提供いただいた資料をそのまま印刷しています。

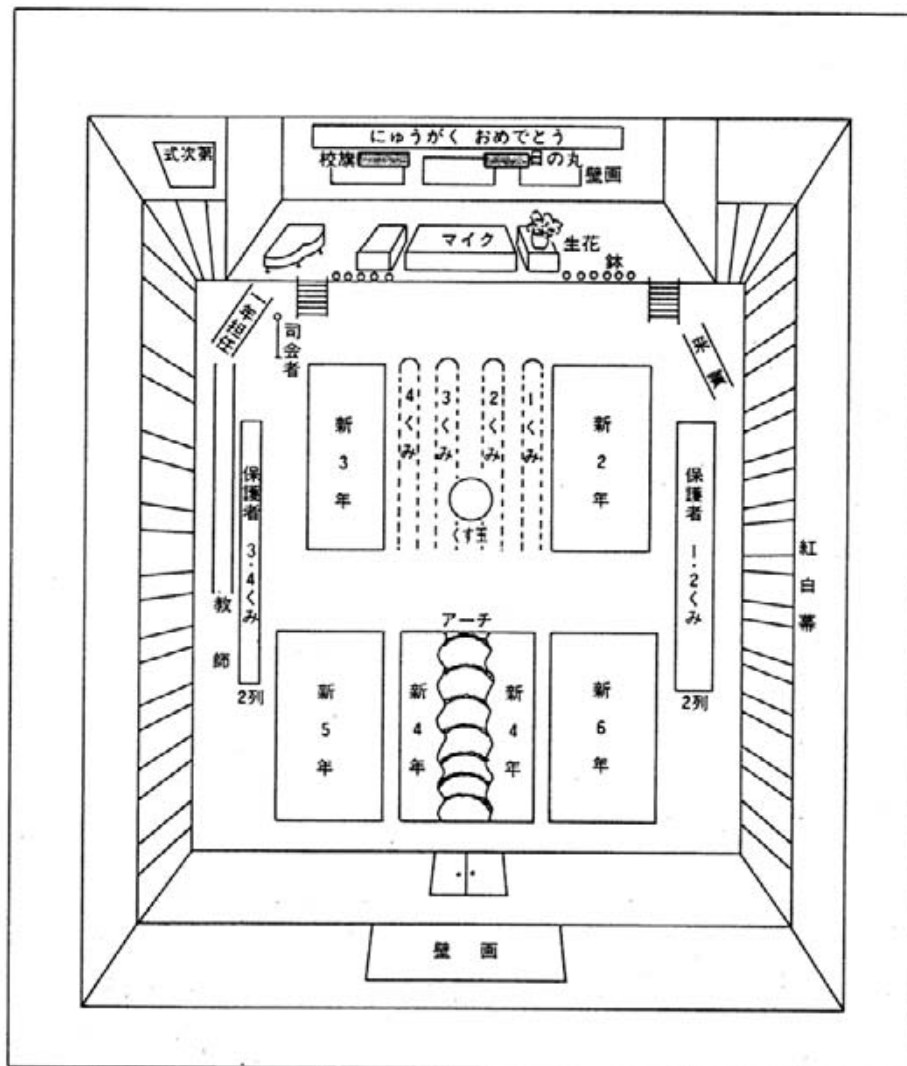


一方、さまざまな工夫を加えている学校もいくつかみられる。(3)は(1)にくす玉とアーチ

を加えただけであるが、ぐっと明るい雰囲気になる。

ます、

(3) 一般的スタイルに工夫を



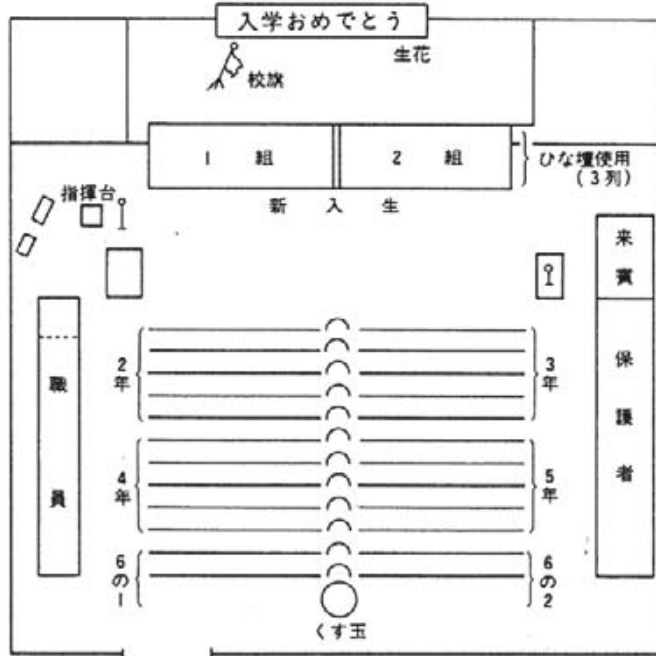
また、(4)は新入生を正面にすえる形だが、これにより新入生の顔が保護者や在校生にも見え、新入生にとっては、とても晴れがましい気持ちになるであろう。しかし、ステージにのせることは、人数が多くなると不可能だろうし、ひな壇利用では、新入生が立っ

なければならないという問題点が残る。

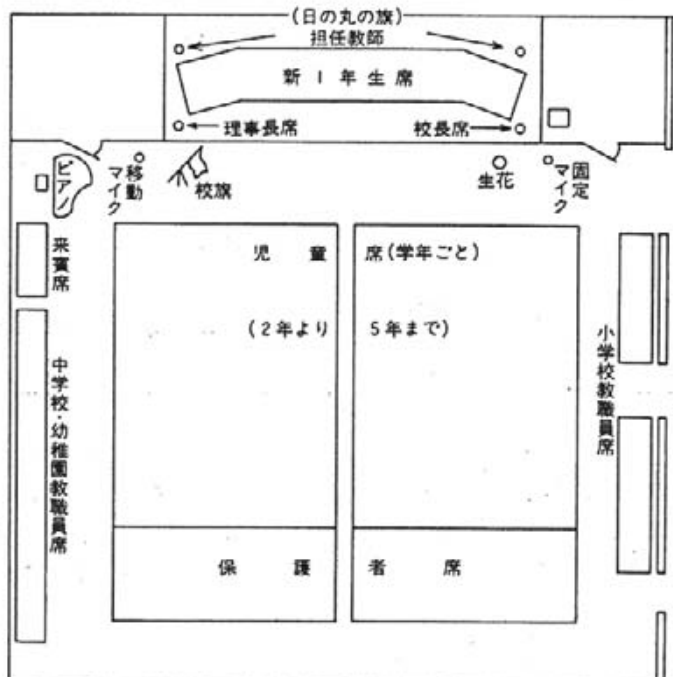
そんな弱点を解消できそうなのが、(5)の向かい合う形である。さらに(6)の、6年生と一緒に並ぶという形も、なかなか工夫されている。

(4) 新入生を正面に

ひな壇利用



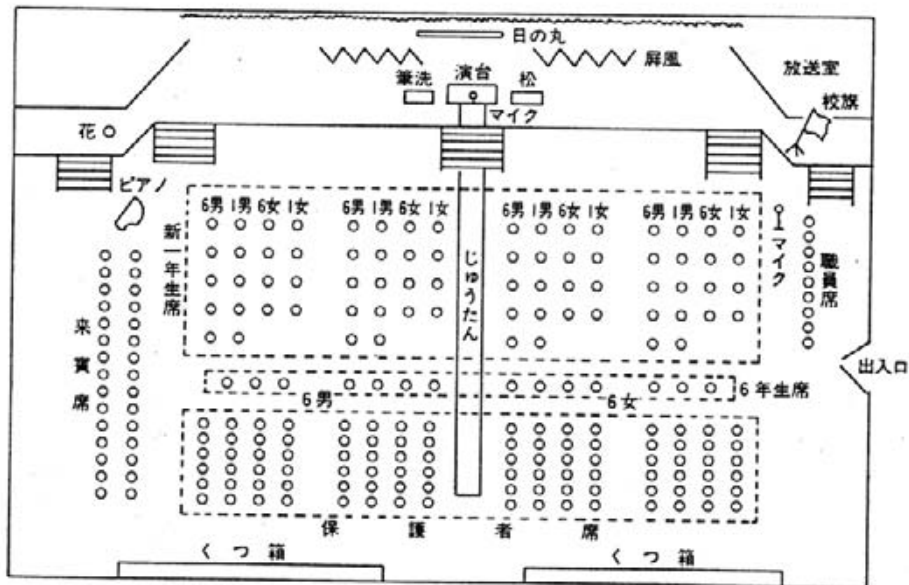
ステージ利用



(5) 向かい合う



(6) 新入生に6年生がつきそって



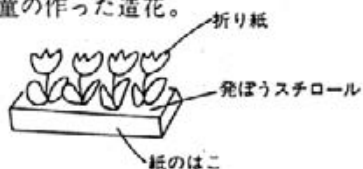
会場の装飾

会場の形と共に、入学式の雰囲気明るくも暗くもするのが、会場内の装飾である。

ここには、いくつかの装飾の例をのせた。会場内は春らしく花が飾られ、入学を祝う看板は、きらびやかに。その他、明るく楽しい雰囲気をつくり出すために、さまざまな努力がみられる。

(1) 花のある風景

- 会場（壇上）に児童が育て咲かせたチューリップの鉢を並べて飾り、花のある会場で新入生を迎えた。
- 会場・式場に春の花（学校で栽培したものを主に）を飾る。
- 演台のまわりに花をたくさん置く。
- 春の感じを出すため会場正面に1～2年生がつくった春の風景。（木・花・鳥などの風景）
- 桜…後面一面に大木。満開場面（新6年）
- 児童の作った造花。



- 校章（約4m四方、朱・紅・白の三色の紙の花を数百はりつけたもの）を掲示した。「友情の花」と名づけた。

(2) 入学おめでとう

- うす紙でかたどった㊦㊧㊨㊩㊪㊫のペニヤをかかげる。
- はとで㊬㊭㊮㊯とはりつけた。
- 千羽鶴の文字「おめでとう」（6年生作）
- 背景に切り紙でうさぎ・犬・ねこ等の絵を切り抜き、手に風船を持たせ、その上に「にゅうがくおめでとう」と字を書き、飾る。
- ラシャ紙で鳥（ハト）を作り、日の丸のわ

きにとばせた。鳥と日の丸の下には、タンポポを作り、はりつけた。上には、「祝入学」の文字。

● ステージ横看板



（ステージ両側壁面に金銀折り鶴）

(3) 明るく楽しい雰囲気を

- 卒業式の時に装飾として使った、4、5年生350名が作った発泡スチロールの鳩300羽を、式場（体育館）の壁面に貼付して入学を祝う。
- 体育館壁面に、大きな折り鶴を配した。
- 5・6年生がステージバックのカーテンに金銀紙や画用紙・紙テープなどを使用し、星（ハレーすい星）を飾りつけた。
- 前面壁面に、紙花で、ハレーすい星とロケットの図案を大きく描いた。
- 正面の壁にちょうちょをあしらったものを60～70羽飾った。
- ステージ壁面に、可愛らしい動物パンダの切り絵を貼った。
- 前面に、とびたつハトの装飾。
- 1年間の行事の絵（模造紙大）を体育館に飾った。
- 明るく楽しい雰囲気を出すため、屋内に花やもようの飾りつけをした。
- 式場にくす玉・万国旗・五色のテープ色紙等を取りつけて、装飾をした。
- 青色・白色の鳥を切りとり、糸でつないで飾った。
- くす玉をつくって、式の途中で、くす玉わりをした。
- 舞台の壁に校章をモチーフした飾りと、その周囲にハトをとばすデザイン。

まとめに代えて

調査協力校のうち、1校だけが、子どもの手で作る入学式を行っていた。巻末に資料としてのせておいたが、式次第等、他の学校と比べても、大きな変化はない。しかし、なにか温かな気持ちが伝わってくる。

それは子どもの手でやっているからというのではなく、在校生も教職員も一体となって新入生を迎え、祝福しようとしているからではないだろうか。

小学校の入学式というのは、言うまでもなく、一生に一度のことである。親たちの手の

中に入った子どもたちが、はじめて一人の人間として集団の中に入っていき記念すべき日であろう。そんな大切な時を、多くの人の手で温かく迎えてあげられるよう、各学校ともさまざまな工夫をすることが求められている。

なお、鎌ヶ谷市の初富小学校から、入学式の実施計画案が送られてきた。どの学校でも多かれ少なかれ、準備に時間をさいているのであろうが、きちんとした取り組み方のモデルとして、資料2の形で紹介させていただくことにした。



※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。